

ホメロスの環は閉じられない ——古代叙事詩の再生をめぐる—— (2)

小 川 正 廣

3. 帰国物語の社会的ヴィジョン——『オデュッセイア』をめぐる

『イリアス』と『オデュッセイア』——ポリスとオイコス

前章では、『イリアス』に示されるホメロスの比較的巨視的な社会的ヴィジョンを考察した⁽¹⁾。すなわち、トロイア戦争をめぐるこの叙事詩において、トロイア人社会に象徴される家族的融和型のポリスと英雄たちの激しい競争の上に成り立つギリシア軍の組織とが対比的に描かれていること、また作品中では前者の共同体が後者の戦闘集団によってやがて滅ぼされる運命が予告されながらも、しかしトロイア型のポリスは、ギリシア軍の集団が内包する問題や危機を克服するための社会的範型として大きな価値と有効性を有する点を、作者は——とくに物語の最後の展開によって——示そうとしたことを明らかにした。それでは、ホメロスのもう一つの作品として伝えられる『オデュッセイア』では、そうした『イリアス』のヴィジョンと関連づけて見るならば、どのような社会観が示されているのであろうか。

英雄オデュッセウスの帰国物語『オデュッセイア』は、さまざまな点で『イリアス』を強く意識して作られたほぼ同規模の長篇叙事詩であるが、正確にはホメロス自身の作かどうか明らかではない。しかし後代の伝承では、それは『イリアス』とともにホメロスの作として伝えられ、長らくこの詩人の文学史上の存在を確固不動のものとする根拠となってきた。おそらく『オデュッセイア』の創作と成立こそが、そもそも『イリアス』の作者を「ホメロス」として定着させた最大の原因をなすのであり⁽²⁾、それゆえ、もし『オデュッセイア』が『イリアス』の後篇として出現せず、『イリアス』のみが当時の叙事詩の群の中で単独で聳え立っていたならば、元来口誦詩であり匿名性を特徴とする作品『イリアス』が——ホメロスであれ誰であれ——何らかの作者名を冠して伝えられる必然性は乏しかったであろうと思われる。つまり、『オデュッセイア』が『イリアス』の後篇として——作品の規模と内容上のつながりにおいて文字どおり——肩を並べるように現われたため、人々はあらためて両詩を結びつける「作者」の存在に注目するようになり、その結果「ホメロス」の名が両詩そのものの組み合わせ、または両詩共通の創作者を示す名前（標識）として広まったのであろう。そして、『イリアス』と『オデュッセイア』とを同一作家の作品として結びつけた実質的理由は、作品の規模と伝統的な口誦詩独特の言語的類似性を除けば、とくに両物語の構成上の類似と内容の緊密な関連性であった。

(1)

とりわけ『イリアス』に対する『オデュッセイア』の内容上の補完的関連性は、注目に値する⁽³⁾。例えば、『イリアス』ではヘクトルの死までのトロイア戦争が語られたのに対して、『オデュッセイア』では、その10年間続いたとされるトロイア戦争終結後のギリシア人の帰国の経緯が、アキレウスやアガメムノンやメネラオスとヘレネ夫婦やネストールやアイアスといった同じ主要人物のその後の運命も織り混ぜながら、同じく10年の期間にわたるオデュッセウスのトロイアからの放浪と帰還を中心にして語られている。また戦争物語『イリアス』の主人公アキレウスが武勇 (bie) に優れ、作品ではそれゆえに定められた彼の短命な人生とその悲劇性に焦点が当てられたのに対して、『オデュッセイア』の中心人物は知恵 (metis) と機略に秀で、それを駆使して成し遂げられる帰国の物語は、英雄の家族との再会実現と彼の長命な人生の予告といった喜劇的結末で終わっている。さらに『オデュッセイア』では、不思議にも『イリアス』の中軸をなす出来事についての言及がほとんど見出されない。すなわち、アキレウスをめぐる女性問題に端を発したアガメムノンとの対立や友人パトロクロスの死に起因する激しい怒りとその結果としての敵将ヘクトルに対する復讐という戦争物語の中心的文脈を構成する諸要素は、『オデュッセイア』ではまったく触れられないのである。この文学的な主要類似モチーフの欠落は、たんに『オデュッセイア』の作者が『イリアス』の物語をよく知らなかったためと説明しうるにはあまりに奇妙である。なぜなら『オデュッセイア』には、アキレウスの死と葬儀、彼の武具をめぐる争い、木馬の計略によるトロイア陥落、ヘレネの奪還、アガメムノンの帰国と暗殺といった、『イリアス』の伝承を前提としながらその作品には含まれなかったトロイア戦争中とそれ以後のさまざまな他の神話的事件について比較的詳細かつ印象的に語られているからである。ラザフォードも指摘するように⁽⁴⁾、『オデュッセイア』の作者は『イリアス』の主要事件の展開そのものへの言及を、それを熟知しつつ故意に回避したとしか考えられず、もしそうであるならば、この『オデュッセイア』の奇妙な「沈黙」は、むしろその作者がどれほど強く『イリアス』の物語を意識して、この卓越した先行作品——たとえ同一作者によるとしても——との補完的な結びつきを綿密に保ちながら、しかし物語の根幹においては新たな内容を構築しようとしたことを示唆するものである。

さて本章では、前章で述べた『イリアス』の社会的ヴィジョンを念頭に置きながら、『オデュッセイア』の英雄物語において人間社会の相互関係がどのように描かれ、そうした社会的意識にもとづく叙事詩の創作によって、作者が同時代の人々に何を伝えようとしたのかを考えてみたい。その際、まず指摘しておきたいのは、『イリアス』が戦争を正面から扱った物語であり、トロイアとギリシア軍のいわば「ボリス」間の抗争に焦点を当て、そのダイナミックな対立に内在する社会的・精神的問題をフィクションの根底に据えていたのに対して、放浪と帰国を語る『オデュッセイア』では、トロイア戦争という「ボリス」同士の衝突と戦いから遠く離れて、社会的関係の中心舞台 (トポス) は英雄の旅の目的地イタカに位置する彼自身の「家」(オイコス) に移されたことである。そして前述のように『オデュッセイア』の作者は、『イリ

アス』の社会観を示すうえで最も重要なアキレウスとアガ멤ノン、あるいはアキレウスとヘクトル、そしてアキレウスとプリアモスの対立や対話の場面との関連をまったく物語には取り込まず、したがってそうした主要人物間の関係の中に含まれた「ポリス」のあり方をめぐる問題を意図的に避けているかのように見える。このように『オデュッセイア』の人間関係は家・家族（オイコス）に集約されて展開しており、そのことから例えばフィンリーは、『オデュッセイア』には「古典期の政治的な意味でのポリスの形跡はまったくない。ホメロスではポリスはたんに要塞化された空間、すなわち町を意味するにすぎない」としたうえで、オデュッセウスの世界についてはもっぱらオイコスのあり方とその具体的構成と営みに限定して歴史的な考察を行なっている⁽⁵⁾。

実際『オデュッセイア』を通して読むと、英雄が最後に滞在するパイアキア人の島スケリアにはたしかに古典期のポリスに相当するような社会的組織が存在することがおぼろげにうかがわれるが⁽⁶⁾、他方肝心のイタカについては、民衆の集会やその運営規則にごく簡単には触れられはしても、ポリスを統率する「王」（バシレウス）や長老会議（ゲロンテス）などの統治形態に関してはほとんど霧に包まれていて実態は何も見えない。しかしすでに1章で検討したように⁽⁷⁾、ホメロスの詩に歴史的事実の比較的正確な反映を読み取ろうとする方法は深刻な限界に直面しているのであり、ここでも、叙事詩は神話（ミュートス＝フィクション）であるという前提に立ちもどる必要があろう。このミュートスというフィルターをとおして見れば、『オデュッセイア』の作者は、主人公のオイコスをめぐるドラマに聴衆（読者）の関心を引き寄せながら、つまり故意に『イリアス』でのポリスの問題を回避するかのように見せながらも——実際戦後の復員譚に熾烈な国家間やその内部の人的対立の問題を真っ向から織り込むのは話題の点でも困難である——、しかし物語の底辺では『イリアス』で示された問題意識を継承し、別の角度から社会全体に関する見方を提起しているように思われる。

そこでここでは、主人公オデュッセウスが故郷イタカに帰着し、妻ペネロペイアの周囲に群がる求婚者たちを一掃する物語後半の展開に注目しながら、作者の社会的ヴィジョンを探ってみよう。

オイコスの危機

父の消息を尋ねる息子テレマコスの旅を中心とした最初の部分（第1～4巻）と主人公自身の帰国のための長い放浪を詳しく語る第二の部分（第5～13巻）の時間的に並行した独立的文脈は、オデュッセウスのイタカ到着（第13～14巻）で一筋に合流し、物語は主人公のオイコス再建のクライマックスへと進んでいく。ほぼ20年におよぶオデュッセウス不在の間、彼のオイコスの状態は妻への求婚をめぐる問題で紛糾していた。ペネロペイアは舅ラエルテスの死装束のための織物の策略によって求婚者たちの求める再婚に関する決定を引き延ばしていたが、その巧みな計略も3年を経て発覚し、またすでにテレマコスが成人した今、夫の生存がな

お未確認のまま再婚の決断を迫られている。ペネロペイアが夫の死を受け入れ、求婚者たちの一人を選んで再婚に踏み切れば、テレマコスがオイコスの主人になって、オデュッセウスの家を継承することができるであろう。しかし息子自身からは母に対して、父の生死が実際に判明しないまま他家へ嫁ぐことを無理強いできない。他方108名にもものぼる多数の求婚者たちは、ペネロペイアを事実上の未亡人と見なし、オデュッセウスの館の中に客人（クセノス）として居座って、連日の宴会によって彼の家の蓄えを大量に消費し、また彼の奴隷たちを勝手に使役している。彼らの目的はもちろんペネロペイアとの結婚であるが、しかし彼らはまた、自宅からの退去を強く要求するテレマコスの殺害も企てていた。

こうした危機的状況の最中にオデュッセウスが帰還する。彼は息子と再会し、乞食姿でよそ者を装ったまま館に潜入して屋敷内の様子を探るが、ペネロペイアがついに再婚を決意して提案した弓競技において、異国の客人として弓を引く。そして求婚者の誰も弦を張れない強弓を易々と引くと、12の斧の的をすべて射抜き、すぐさま求婚者たちに武器を向けて、息子と奴隷らの協力を得て彼ら全員を殺す。

しかしその後、イタカとその周辺に根拠を置くきわめて多数の若者たちの殺害は、彼らの親族からの報復行動を惹起させた。第24巻では、亡霊となった求婚者たちがアガメムノンとアキレウスの霊魂と地下で出会う場面のおと、オデュッセウスが父ラエルテスと息子とともに攻め寄せた敵の親族と戦い始めたときに、神々から戦闘中止の指示が下る。そして全物語は、双方の間の突然の和解への言及によって終結している。

このように『オデュッセイア』全篇は、前半で独立的に語られた英雄父子の動向が後半ではイタカでの単一の出来事と合同の行為に収斂し、オデュッセウスの長期の不在のために深刻な危機に陥った彼の家（オイコス）が、主人公の帰還と父子の共闘によって壊滅と離散を免れ、元の状態に復して以後の存続を確保するという展開を軸にして統一的に構成されている。しかしオイコスの危機とそこからの救出についてのこの物語展開が、たんにオイコスの内部だけで完結しているのではないこともまた明らかである。そもそも危機の原因は、求婚者たちによる結婚の要求と邸宅の占領という、一般に有力なオイコスが通常維持せざるをえない外部世界との相互関係すなわち客人待遇（クセニア）にもとづく行動であり、また、この慣習に依拠して到来した客人たちを——彼らの精神がいかに悪辣で不道德であり、さらに弓競技という武力判定でも完全な無力をあらわにしたとはいえ——ほとんど一括して抹殺するという行為は、全物語の結末場面に描かれるように、その必然的な結果としてやはり外部社会に対して小さからぬ影響を及ぼし、彼らが所属する他の諸オイコスによる復讐のための武力行動を発生させている。こうしてホメロスは、オデュッセウスによる家族集団の再建をより広域の人間関係の中に位置づける視点を提供し、物語全体にたんなる勸善懲悪とは異なる社会的意味合いをもたせている。

ホメロスが後半において、不運と横暴に耐え抜いた主人公を中心とするごく少数の集団と傲

慢不遜な多勢の求婚者たちとの対決に向かって聴衆の関心を高揚させるように物語を進めたことはたしかである。その結果叙事詩の結末近くで、卑劣で暴虐な求婚者たちを賢明かつ慎重で正義をわきまえた英雄が完璧に打倒するという成り行きは、聴衆の期待を大いに満足させたであろう。現代の多くの読者も、実際『オデュッセイア』をそのように読んでおり、それはけっして読者の側の誤読ないしは偏った解釈ではなく、多くの民衆の間に圧倒的な人気の基盤を築いた作者ホメロスが意図的に工夫した物語の基本的かつ常套的な技法に起因している。とくに『オデュッセイア』の場合、作者は第1巻冒頭において、最高神ゼウスに「元来人間たちの災いは、神々ではなく彼ら自身の無謀 (atasthalia: *Od.* 1.34) によるものである」という趣旨の印象的な言葉を発言させ、最初から全篇の内容の受けとめ方を大きく方向づけている。そこから、求婚者たちの死は彼ら自身の不遜で思い上がった行為に起因する自業自得の事態であり、また彼らを一律に殺害して悪徳を根絶させた主人公は、神の意向に支持された正義の使者あるいは神の代理人であるという読み方が古代以来流布してきたとしても、何ら不自然ではないのである。しかしホメロスは、こうして多くの人々にとって明快かつ爽快な受容の仕方をみずから入念に準備し設定しておきながら、それをまた別の角度からとらえる視点を加えて、聴衆(読者)に人間世界の現実と真相を考え直す機会を与えている。そこで、物語後半の軸をなす英雄と求婚者たちの対立の問題について少し詳しく検討してみよう。

求婚者たちの目的

まず、求婚者たちのオデュッセウスの館での行動の目的は、はたしてペネロペイアとの婚姻だけであったのか。また、ペネロペイアとの結婚は、彼らにとってどのような意味があったのであろうか。この問題については従来多様な見方が示されてきたが⁽⁸⁾、最も一般的に引用されてきたのはおそらくソーントンの論に代表される見解であらう⁽⁹⁾。ソーントンによると、求婚者たちは第2巻の集会所でのテレマコスとの論争などの場面でたびたび、ペネロペイアとの結婚を唯一の目標とするかのように語っているが、しかし第16巻では彼らの代表的格の一人アンティノオスが求婚仲間との集まりで「テレマコスを生かしておくかぎり、われらの本願は成就しないだろう。……(テレマコスを殺したうえで：筆者注) 食料と財産はわれらが所有し／互いに分け前として分かち合おう。／館はかれの妻とその夫になる者に渡せばよい」(*Od.* 16.372-373, 384-386) と述べるように、彼らが第一に求めるものはじつはペネロペイアとの結婚ではなく、それを口実にしてオデュッセウス家に逗留し続け、その資産を消散させることであるとされる。そして富と財産こそが王権を支える最も重要な条件であるとすれば、彼らが目論むのは王権の基盤の切り崩し、つまりまさにイタカの王としてのオデュッセウスの地位を奪うことである。実際第2巻の集会で求婚者レオクリトスは、たとえオデュッセウスが帰国しても(したがって求婚の根拠はなくなっても)、彼らはその館を離れず、相手が死ぬまで戦うだろうと発言している(2.242-256)。

求婚者たちの最大の狙いはイタカの王権であり、彼らにとってペネロペイアとの結婚はその手段としてのみ意味があるとする見方はすでにヴェルナンの婚姻論においても示されていたが⁽¹⁰⁾、ソントンの議論はとくにその点をホメロスの作品に即して明確にしようとした。しかしそれに対して、イタカの王権そのものの存在を強く否定したのはハルヴァーソンである⁽¹¹⁾。ハルヴァーソンは、「ホメロスにおけるポリスはたんなる町にすぎない」という前述のフィリーの指摘を受けて『オデュッセイア』のテキストをさらに詳細に検討し、イタカには「集会」（アゴラ）の慣例は存在しても、オデュッセウスの出征以来20年間その地の人々は集会所に集まっておらず、またそうした漠然とした村落的共同体の中で、「王」（バシレウス）は何らかの統治組織を統括・運営すべき義務や権限をとまなう地位としてはまったく描かれていないと結論づけている。実際イタカでは、バシレウスと称されるオデュッセウスが20年間不在であっても、公的秩序に関しては何ら大きな支障や騒動は生じなかった。それは、オデュッセウスが明確な政治的支配機構の最高権力を保持する人物ではなかったことの証拠であろう。したがってハルヴァーソンは、求婚者たちの行動とそこから派生した事態は、純粋にオイコスの範囲内に関わる問題であるとしている。

『オデュッセイア』の求婚者たちがポリスの王権篡奪を目論みうる存在ではありえず、まさに求婚者以外の何者でもないとするれば、ではペネロペイアとの結婚の価値とは、彼らにとってより正確にはどのようなものだったのか。これに関して例えばフィンケルバークは、古代ギリシアにおける母系制の名残りに着目し、『オデュッセイア』の求婚譚には王女との結婚による王位継承の神話が反映されていると見るが⁽¹²⁾、しかしこの叙事詩では上述のようにオイコスを越えた政治的組織と王の機能自体がはっきりしないゆえに、オデュッセウスの妻の再婚を王権の継承と直結させることには無理であろう。一方、フィンリーとハルヴァーソンの指摘を踏まえて有益な考察を行なっているのはトマスである⁽¹³⁾。簡潔に述べれば、トマスは女性ペネロペイアをオイコスにおける富の蓄積と経済的生産性の象徴と見なしている。実際作品において彼女は——卓越した美女である点を別にすれば——とりわけ織物の名手として讃えられているが、織物の技術に優れた女としては、ホメロスでは他にもヘレネやアンドロマケあるいはキルケといった特別に高貴な女性たちが挙げられる。織物はとくに客人関係（クセニア）において必需の贈答品としての社会的価値を有するゆえに、それを多く生産して蓄えうる能力はオイコスの地位の向上につながり、その生産を担う女主人は夫の社会的名望を大きく高める重要な役割を果たす。トマスが王権移行のためのたんなる媒体としての役割ではなく、オイコスを豊かにするというこうした内在的価値にペネロペイアの最大の特徴を認めた点は興味深い。それにしたがうと、彼女の再婚は求婚者たちにとって、オデュッセウス家に匹敵する経済的繁栄と社会的名声をもたらす得がたい機会であると考えられたということになる。

はたして求婚者たちの真の目的はイタカの王権であって、ペネロペイアとの結婚はそのための口実ないしは手段にすぎなかったのか。それともイタカにはそもそも王権などは存在せず、

ペネロペイアという女性自身に大きな価値があったからこそ、彼らはひたすら彼女との結婚を求めていたのか。たしかにハルヴァーソンの指摘のように、『オデュッセイア』ではイタカの統治形態は王を頂点に戴く明確な政治組織としてはまったく描かれておらず、したがって「バシレウス」という尊称が統治者の地位を指すとするには、その実態はあまりにも曖昧である。しかし求婚者たちの目的をペネロペイアとの婚姻そのものに重点を置いてとらえるにしても、その結婚は、トマスによって論じられたように彼女の妻としての存在がオイコスの地位の向上と密接な関係にあるとすれば、オイコスを越えたもっと広い社会的文脈の中で卓越した価値を帯びていたと考えられる。ペネロペイアが富の蓄積の象徴であれ、あるいは何かほかの魅力——例えば彼女の親の血統など——を体現しているのであれば、彼女との結婚は社会的にきわめて高く評価されうるという前提があるからこそ、あれほど多数の求婚者が集まってきたのであろう。つまり彼らは、ペネロペイアを妻にすることによって、オイコスの中心的女性としての彼女が大きく貢献しうる社会的な価値と評価を手に入れようと切望したのである。そして妻の所有にともなうその社会的価値が、オデュッセウス自身のバシレウスとしての地位と無関係であるとは考えにくい。たとえペネロペイアの夫としての地位がイタカの統治機構の中で客観的に規定されうる王権を意味することはなくても、実際彼女を妻とする世帯の形成とその存続によって、英雄は長期間不在のままでもなお「バシレウス」——とりあえず「卓絶した有力者」とでも解釈するほかない——の地位を保持しえたのである。それゆえペネロペイアの存在とオデュッセウスの地位とは、何かの理由でつながっていると推測できる。たしかにオデュッセウスのオイコスは、イタカの王家と同一視することはできない。また英雄のオイコスと彼の社会的地位との関係もどのようなものかはっきりとは言及されないが、しかし少なくとも求婚者たちの集団的行動は、オデュッセウスのオイコスと彼が社会的に有しているバシレウスの身分との間に何らかの関連があることを示しているのである。

このようにオイコスの女性としてのペネロペイアは、求婚者たちの社会的願望の的であると同時に、オデュッセウスの社会的地位とも結びついているように思われるが、それではこれらの三つの要素は物語の中で具体的にはどのように関係づけられているのであろうか。この点を明らかにするために、作品に即してペネロペイアをめぐる英雄と求婚者たちの対立と競合の関係をやや詳細に見てみよう。

求婚の第一段階——テレマコスの成人以前

ペネロペイアをめぐる求婚者たちの動向は、スコデルが示したように⁽¹⁴⁾、おおむね三段階に分けることができよう。まずその第一段階は、英雄の一人息子テレマコスが成人として登場するまでの事態であり、それはじつは叙事詩が始まる時点で終わっているのであるが、しかし作品のその後の展開の中のさまざまな言及から十分推測可能である。この段階では、オデュッセウスはもちろんまだ行方不明であり、求婚者たちはペネロペイアがいつかは再婚の求めに込

じるだろうと信じて、彼女に選ばれるためひたすらライバルを打ち負かそうと、めいめい説得工作を懸命に繰り広げる。例えば第13巻で女神アテナは、彼らがオデュッセウスの妻に結婚を求め、「求婚の贈り物をしながら、三年もの間あなたの館で主人のように振る舞っている」と英雄自身に語っている (*Od.* 13.377-378)。一方ペネロペイアは、本心を偽って彼ら一人一人に私信を送り (2.91-92; 13.380-381)、またラエルテスのための死装束を織り上げるまで待つてほしいと告げたあと、じつは毎夜その織物を解きほぐして、彼らの求めに応じる時期を三年間引き延ばしていた (2.93-110; 19.138-156; 24.128-146)。しかしこの段階は、作品冒頭で成長したテレマコスが、求婚者たちに対して館からの退去を要求する人物として登場したときに終わる。

この最初の段階での求婚者たちの行動について、第1巻のテレマコスと彼らとのやり取りは重要な示唆を与えている。例えば館からの退去を大胆に求めたテレマコスに対して、求婚者アンティノオスは、イタカでバシレウスたることは血統では彼が父から受け継ぐものであっても、神ゼウスはそれを実現させはすまいと反論する (*Od.* 1.386-387)。またその発言を受けてテレマコスは、バシレウスの地位は他人が得てもかまわないが、自分はいくまでも父親譲りの世帯(オイコス)と館の主人であり続けるだろうと主張する (1.394-398)。さらにこの口論に加わった求婚者エウリュマコスは、皮肉な口調でこう述べている。

「テレマコスよ、誰が海に囲まれたイタカでアカイア人の
バシレウスとなるかは、神々の膝の上にあることだ。
おまえは財産を握って、自分の館を治めるがよい。
イタカが存続するかぎり、おまえの財産を力で無理やり
奪うような男が現われぬようにな。」 (『オデュッセイア』第1巻400-404)

これらの対話からは、オイコスとバシレウスの地位は血縁という人間関係によってつながりうるとはいえ、しかしまた両者は分離可能でもあることがわかる。そしてとくにアンティノオスとエウリュマコスの言葉からは、バシレウスの地位が特定のオイコスから離れて公的な争点になりうることに同時に、これまでの求婚者たちの狙いの少なくとも一部が、今はオデュッセウスのオイコスに付随してはいても、神々の意向次第ではよそに——つまり可能ならいつでも誰か他のオイコスの人間に——移りうるバシレウスの地位であったことがうかがわれる。求婚者たちがそうしたオイコスの血縁関係から分離しうるバシレウスの地位を求めていたことは、のちにテレマコスがエウリュマコスについて「たいそう高貴な身分で、／わたしの母と結婚してオデュッセウスの栄誉(ゲラス)を得ようと熱意を燃やしている男です」(*Od.* 15.521-522)と述べていることから明らかである。

こうして求婚者たちの最初の意図には、バシレウスの地位をオデュッセウス家の血統から切

り離して、みずからそれを獲得することが含まれていたと考えられるが、しかしもちろん彼らはその意図をあくまでもペネロペイアとの婚姻を通じて達成することのみを願っており、他のオイコスの娘との結婚は念頭に置いていない。それは、ペネロペイアという女性の内在的価値とともに、彼女が夫の留守中に保持・管理しているオイコスの実質的資産のゆえでもあろう。実際上述のエウリュマコスの言葉では、求婚者たちがオデュッセウスのオイコスの財産の獲得をも目論んでいたことが暗に示されている。このように求婚者たちの側から見た場合、最初に彼らがペネロペイアとの結婚の目的として望んでいたことは、妻としての彼女自身、彼女のオイコスの資産、そしてオデュッセウスが有しているバシレウスの地位という三つの利点が考えられるが、しかしそれらの利点は、別々の要素でありながらも互いに結びついていた。

したがって物語の初まりまでの時点では、ペネロペイアとの結婚は求婚者たちにとって、以上の三つの利点を一挙に獲得できる機会であり、彼らはその大きな価値のあるコンテストに挑戦し、互いに競争を繰り返していたのである。しかし、その後彼らの前に立ちはだかかったのは、すでに成人の年齢に達したオデュッセウスの息子テレマコスであった。テレマコスは、父親が死んだ場合嫡子としてオイコスの主人になり、寡婦になった母親の処遇についても、またオイコスの財産の管理についても自分の意志で決定することができ、さらに対外的には上述のように亡父のバシレウスの地位をも継承することができる。その結果求婚者たちにとっては、成人した彼の登場とともに、三つの目的のすべてが実現不可能になりうるという新しい事態が訪れることになる。

ところで、成人以前の最初の段階ではテレマコス自身は力も権限もない未熟な子供として扱われ、オイコスをめぐる事態に関わることはなかったが、一方求婚騒動の争点となったペネロペイアのその間の動向はどのように説明できるであろうか。前述のように彼女は、私信を送って求婚者たちの気をそそる気配を見せながら、他方では織物の策略を用いて再婚の決定を遅らせていた。彼女のこのどちらともつかない曖昧な態度については、テレマコスも「母は嫌な結婚を拒みもせず、／(求婚を受け入れて：筆者注) 決着をつけることもできない」(Od. 1.249-250=16.126-127)と語っている。このペネロペイアの微妙な態度に関して、例えばフェルソン・ルービンやラソーは女性独特の意識を読み取り⁽¹⁵⁾、大勢の若い男たちに注目されることをできるだけ長く楽しみたいという女の願望の表われであると指摘するが、しかし彼女のオイコスを取り巻く状況を考慮すれば、そうした少々穿った心理学的解釈を用いる必要はないだろう。

まず求婚をめぐる現状として確認できることは、家の主人であり夫でもあるオデュッセウスが20年もの間不在で生死が判明しないことから、ほとんど寡婦の立場にあるペネロペイアに対して多くの男たちが——誰もはっきりと不当とは断定できない——再婚を求め、その意向を貫くために彼女の家客人(クセノス)として留まり続けているという事態である。この状況に対する解決策を講じる際、オイコスの女主人ペネロペイアにとって最善の結果とは明らかに、そうした異常な事態を利用して若い男たちの求愛を楽しむことなどではけっしてなく、む

しろオイコスの状態が正常に復し、これまでどおりに保全されることである。それは具体的に言うと、(1)自分が余儀なく再婚決定に追い込まれることなく、今の夫の妻のままでオデュッセウスの帰還を迎えることであろう。しかし、もしもオデュッセウスの死が明らかになればどうだろうか。その場合には、オイコスの主人の妻として彼女は、次善の結果として、(2)息子テレマコスが世帯の最高管理者となり、ひいては彼が——オイコスの繁栄に必要でもあるため——亡き夫のバシレウスの身分をも継承することを望むだろう。一方、彼女にとって生じてほしくない最悪の結果は何かと言えば、それはまず、(3)みずからが待望するオデュッセウスの帰宅が将来実現したときに、すでに自分が再婚を決定して新たな夫を迎えてしまっていることであり、また逆に(4)オデュッセウスの死が判明した場合には、オイコスの主人の後継者の地位にありながらまだ未成年のテレマコスが、乱暴で多数の求婚者たちとの対立に巻き込まれて命を失うことである。

以上の状況確認とペネロペイアの妻としての立場を踏まえて彼女の動向を見ると、まず再婚を決断できない理由は、何よりもまだオデュッセウスの生存を否定できないからであり、彼の生存の可能性があるかぎり、上述の最善の結果(1)に対する期待と最悪の結果(3)を回避しようとする意識が強く働くのは自然であろう。しかし英雄の生存の可能性は、求婚者たちによって強く否定され、また彼女自身もしばしば夫はもう帰らないという趣旨の言葉を漏らしている。したがってペネロペイアは、実際に夫が死んだと判明した場合や彼の死を公然と認めざるをえなくなった場合をも十分想定しており、それに対して講じた手立てが、再婚承諾の遅延と求婚者たちに気を持たせるといふ一見矛盾した態度による両面的作戦である。これはいずれも、夫の死後のテレマコスに対する配慮に由来しており、もう一つの最悪の結果(4)を回避し、次善の結果(2)を確保する対策であると言えるだろう。すなわち、まず、息子が未成年のままで彼女が再婚を了承したならば、実家にもどり父イカロスを後見人として新しい夫を迎えるにせよ、あるいは——例えばスパルタ王家の娘ヘレネが婿メネラオスを迎えたように——今の家にいたまま別の夫と結婚するにせよ、テレマコスはオイコスにおける父の後継者すなわち家父長の座に就くことができず、彼の将来を危うくすることになるであろう（とくに夫が妻の家に居住する後者の場合は、その新しい夫が妻の前夫の子の主張を抑えつけるのはたやすいだろう）。そのため彼女は、息子が成人するまでは何とか婚礼の時を引き延ばさねばならないのである（もちろんこの方策は夫の生存の場合にもある程度備えうる）。他方、オデュッセウスが死んだとわかって再婚しないという別の選択肢もありうることはたしかであるが、しかしそれを選んだ場合、息子の身にもっと大きな危険が迫るだろう。実際テレマコスは第1巻で、母が再婚を遅らせているだけでも、求婚者たちは「わたし自身までも八つ裂きにしてしまいそうだ」(Od. 1.251)と述べている。威勢がよく苛立った求婚者たちの注意をテレマコスという彼らにとっての不安材料から逸らし、この無力な未成年の息子の身を守るためには、不本意でも思わせぶりな態度を示して、彼らの視線を自分に引き寄せておく必要があったのである。

このように見てくると、ペネロペイアは夫の生死のいずれの場合をも見越して、再婚を拒否せずにできるだけ遅延するという曖昧な態度を意図的に取り、求婚者たちに対抗しようとしたことがわかる。オデュッセウスは出征するときに「息子に髭が生えたのを見届けたら、／家を出て自分が望む男に嫁ぐがよい」と彼女に言い残した (*Od.* 18.269-270)。それゆえにペネロペイアは、テレマコスの成人後には本気で再婚しようと思っていたかもしれない。しかしともかく息子の成人までの間は、何とか現状のまま持ちこたえねばならなかったのである。もちろん、この周到な戦略にも不利な点はあった。それは、求婚者たちが連日の宴会で家の資産をすり減らしていくことである。しかしおそらく彼女は、最悪の結果に陥って一挙にオイコスの全財産を失うよりは、それが少しずつ流出していくほうがましであると判断したにちがいない。またこの点に関しては、ペネロペイアが求婚者たちに私信を送るのみか、めいめいに「求婚の贈り物」さえ約束させ (13.378)、彼らの間での贈与による競争を煽っていたことにも留意したい。女性の立場をうまく利用したこのような個別操作は、求婚者同士を張り合わせ、まずは彼女と息子の二人にとってきわめて危険な集団の結束を防ぐためであったと考えられるが、それと同時に、長期にわたる家の財産の減少を補填するという経済的効果もたしかにもたらしたのである。

求婚の第二段階——テレマコス暗殺の計画

さて、以上の第一段階は成人したテレマコスが第1巻で登場して終わる。彼は館で求婚者の群れに対して退去を要求し、翌日の集会所での公的な議論を提案する (*Od.* 1.368-380)。集会で彼はまず、求婚者たちがペネロペイアの実父を通じて正式に縁組を申し出ず、亡父オデュッセウスの館に長期間居座って財産を消費していると訴える (2.40-79)。それに対して求婚者アンティノスは、ペネロペイアの織物の計略を責めたうえで、彼女を実家へ帰して再婚の準備を進めるまでは館からは退去しないと反論する (2.85-128)。テレマコスは返答に窮し、じつは父の生死は定かでなく、また他の理由もあって母を無理に実家へ帰すことはできないと言う (2.130-137)。彼としては、オイコスの資産が侵食される事態は耐え難いが、だからとて、まだ父の生死が確定しないのに母をオデュッセウス家から引き離すこともできない。求婚者たちはそのジレンマを利用し、以前のまま館で飲み食いして求婚を続けようとする。そのためテレマコスは事態の打開のため、このあと父の消息を確かめるための旅に出ると告げるが、そのとき彼らに向かって「わたしは何かしておまえらを死神のところへ送ってやるぞ」と敵を驚かすような脅迫の言葉を投げつける (2.316)。

こうして物語が始まる時点ですでに求婚問題は第二段階に入っており、それは求婚者たちの脅威的としてのテレマコスの出現とともに始まっている。もはや幼い子供ではなく、独立した成人でオイコスの代表者——ないしは不在の父の公式代理人——としてのイタカの集会の召集とそこでの大胆な発言、さらには父の行方に関するギリシア本土への調査旅行の敢行と

いった彼の一連の行動を脅威として受けとめた求婚者たちは、やがて彼の暗殺を企てる。テレマコス第2巻の集会でイタカの人々に求婚者たちの振る舞いを止める行動を起こさせることはできなかったが、しかし敵の集団に対しては深刻な妨害になりうる者として自己の存在を示しえたのである。こうしてテレマコスを邪魔者として殺害することが必要になったとき、彼らが求婚の成功によって三種の利点を一挙に獲得するという理想的な条件は変更を余儀なくされることとなった。もし彼らのうちの特定の一人が勇気を奮って犯行を引き受け、首尾よく殺害を成し遂げたとしても、そのためにその人物はペネロペイアと結婚できるかどうかかわからない。むしろその男は、やがてこの名家の中心的人物に対する犯行が公になって罪を追及され、さらに彼女自身も息子殺しの犯人を知ったなら、将来の夫に選ばれる見込みはまず絶望的だと見るのが道理であろう。したがってテレマコス殺しは、その行為とともに犯罪の責任をも全員で分担しながら、求婚者たちが団結して秘密裏に行なわねばならなかった。たとえその凶悪な犯罪が発覚しても、百人以上が関与したきわめて多数の共同的行為であるならば、再婚自体を取りやめる理由にはならない。これまでペネロペイアの巧みな操作も作用して互いに競合していた彼らには、今度はテレマコスという障害を除くために一致協力することが必要になったのである。そしてこの新たな状況に対応して、求婚者たちが目指しうる利点も変更されねばならなかった。

求婚の第一段階での成功の利点は、妻としてのペネロペイア、そのオイコスの資産そしてバシレウスの地位であった。しかしこの新たな段階では、将来求婚の争いに勝ちえた者はもはやそのすべてを独占することはできない。危険な犯罪を分担するのなら、当然その報酬も分かち合わねばならないのである。そしてこの三点のうち、最終的な求婚の勝者が敗れた他の求婚者たちと分け合うことができるものがあるとすれば、それはもちろんオイコスの資産だけであろう。妻や地位は分割できないが、財産は分割可能である。上述の場面で旅行前のテレマコスが求婚者たちに脅迫的な発言をしたとき、すでに彼らの一人が次のように述べている。

「だがかれ（テレマコス）としても、うつろな船で行くからには、
まさにオデュッセウスのように漂流し、身内から離れて死ぬかもしれない。
こうしてわれらの苦労も増えることになる。
つまり、われらは財産すべてを分け合わねばならないし、
館はかれの妻とその夫になる者に渡さねばならない。」

（『オデュッセイア』第2巻332-336）

財産分割の着想は、テレマコスが公共の場で求婚者たちの障害的存在として現われたときすでに、共同的行動の必要性を感じた彼らの念頭に浮かんでいた。そして第16巻において彼らは、旅から帰国したテレマコスを実際に待ち伏せて殺害しようとするが失敗する。そのとき憤った

求婚者アンティノオスは仲間に対して、相手が集会所で暗殺の陰謀をイタカの人々に暴露するまえに再度の殺害計画を実行しようと主張し、次のように述べる。

「人々が邪な行ないを聞いて、褒めるはずはなかろう。

かれらが何か仇をなし、われらが故国から

追放され、他国に移るようなことにはならない。

そこでわれらは先を越して、町はずれの農地か

道でかれを捕まえよう。食料と財産はわれらが所有し、

互いに分け前として分かち合おう。

館はかれの妻とその夫になる者に渡せばよい。」（『オデュッセイア』第16巻380-386）

ここで最も有力な求婚者の一人アンティノオスが、分配の対象とすべき資産として「食料と財産」すなわち明らかに動産のみに言及しており、不動産の農地などの土地や奴隷などの人的資産はそこに含めておらず、さらに他の主な不動産である邸宅もまた、前述の仲間の言葉においてと同様に、ペネロペイアと新しい夫に属すべきものとしている点に注目したい。このあとアンティノオスが提案した暗殺の再試行は、別の求婚者アンピノモスの反対によって止められ（16.400-408）、また同じ案が第20巻で再び浮上したときも、神の予兆が現われたあとアンピノモスの忠告によって妨げられる（20.240-256）。テレマコス暗殺はこうして未遂に終わるが、しかしその計画自体はメドンという伝令使を通してペネロペイアに知らされる（16.409-412）。そしてその情報を得たあとのペネロペイアの新たな行動によって、求婚者たちの動きの第二段階は閉じることになる。

たしかに第二段階が終わる時点では、暗殺計画が実現していないため、求婚に成功した者は動産を仲間たちに与えてそれ以外のものを獲得しようという臨時の変更もまた一旦宙に浮いたと言える。しかし、だからとて三種の利点を一挙につかむという第一段階の理想的な条件にもどったわけではない。求婚者たちの前には依然としてテレマコスという障害が立ちただかつており、彼が健在であるかぎり、ペネロペイアを妻にすることはできるが、オデュッセウス家の資産を得ることはきわめて難しいことがこの第二段階の展開で明らかになったのである。

バシレウスの地位

ところで、この第二段階が終わった時点の状況では、オデュッセウスが有するバシレウスの地位についてはどうであろうか。それに関しては、テレマコスの暗殺計画をめぐる求婚者たちのやり取りの中に直接的な言及は見出されないが、前述のテレマコスの発言で「たいそう高貴な身分で、／わたしの母と結婚してオデュッセウスの栄誉（グラス）を得ようと熱意を燃やしている男」（*Od.* 15.521-522）と呼ばれたエウリュマコスの言動は興味深い。テレマコス暗殺

の再試行を促したのは上述のようにアンティノオスであったが、その陰悪な動きを知ったペネロペイアが彼に対して殺害の企みを強く非難して叱責すると（16.418-433）、エウリュマコス は、彼女を安心させるために次のように述べている。

「ご子息テレマコスに手をかけようとするような者は、
わたしが生きて、この世に陽の光を仰ぐかぎり、
今もこれからもいないし、また生まれてもこないでしょう。
そのようにはっきりと申し上げ、それはかならず果たしてみせます。
そんな男は、すぐにわれらの槍にかかって黒い血を流すでしょう。
かつて城を滅ぼすオデュッセウスは、よくわたしを膝の上に座らせて、
焙った肉を手にとらせたり、
赤い酒を飲ませたりもしたのですから。
だからわたしにとって、テレマコスは誰よりもはるかに親しく、
求婚者たちから命を奪われる恐れなどありえないと強く申しておきましょう。」

（『オデュッセイア』第16巻437-446）

これはもちろん、暗殺の試みの事実を否定するとともに、仲間と共謀した犯罪的計画への自己の関与をも隠そうとする巧みな偽りの言葉であるが、しかしこの虚言においてエウリュマコスが、「城を滅ぼす」オデュッセウスによって幼いころから可愛いがられた自分こそが彼の英雄的な勢力を受け継いで周囲に目を光らせることができ、また彼の息子で年少のテレマコスも親身になって守ってやれる立場にあることをとくに誇示している点は、なお彼がかつてのオデュッセウスと並ぶるバシレウスの地位獲得に野心を抱いていることを示唆するものであろう。さらにまた、第22巻において弓競技のあと乞食の衣を脱ぎ捨てたオデュッセウスが最初にアンティノオスを射殺したとき、エウリュマコスは、今度はこの首謀格の人物にすべての行為の責任を転嫁しながら、次のように述べて英雄に助命を願い出ている。

「この男（アンティノオス）こそ、それらの仕業の口火を切ったのだ。
かれは結婚を望んだとか求めたとかいうよりも、
じつはほかのことを考えていて、クロノスの子はそれを成し遂げなさらなかった。
それはよき造りのイタカの国で、みずから王たらんとする目論みだった。
他方かれは、あなたの息子を待ち伏せして殺そうと企んでもいた。」

（『オデュッセイア』第22巻49-53）

オデュッセウスの怒りをアンティノオスに向けるのに最も効果的な方法は、彼がとりわけ

「王」(バシレウス)の地位を狙っていたと強調することであろう。ここでもエウリュマコスには真相を隠し、みずからの野心を仲間の一人——しかも先に死んで物言わぬ者となった最も過激な人物——に帰して潔白を主張している。つまりこの明らかな逃げ口上は、むしろ彼自身の真意を投影したものと思われる。ペネロペイアを妻に娶って卓越した地位を得る基盤を築き、そのあと可能ならば亡きオデュッセウスの資産を継承した強力な対抗者テレマコスをはひそかに——すなわち妻を含めて誰にも知られないようにして——抹殺する⁽¹⁶⁾。そうした意図がこの男自身のものでもあることを即座に見抜いたオデュッセウスは、エウリュマコスの弁明を退けたあと、ただちに求婚者全員に対する報復的攻撃を開始している。前述のように、バシレウスの地位はオイコスの血縁関係から分離しうるものであった。したがって、最も功名心に駆られた求婚者たちには、成人したテレマコスがオイコスの資産の継承を主張したとしても、ペネロペイアとの結婚を成就させれば、不在のオデュッセウスに代わって彼に匹敵するバシレウスの地位を望みうる余地はまだ十分残されていたと言えよう。

他方、ペネロペイアの側から見ると、実際に息子殺害が試みられたことを知ったうえは、これまで懸念していた以上にテレマコスの生命を守る強い必要性に迫られることになった。そのとき、女神アテナが介入する。女神がペネロペイアに求婚者たちの前に姿を現わすよう仕向けると(*Od.* 18.158-162)、彼女はエウリュマコスに対して、息子が成人したとき家を出て再婚せよというかつてオデュッセウスが残した言葉を初めて公表し、事態はそのとおりになろうとしていると告げる(18.259-273)。ペネロペイア自身が再婚の決意を表明すれば、求婚者たちの焦燥感は相当和らぐ。また彼ら全員の面前に彼女自身が現われるなら、男たちはみな特別に美しいその姿に幻惑されて再び競争心を掻き立てられ、テレマコス暗殺のための団結と協力の態勢はかなり弱まるだろう。しかもオデュッセウスが残した言葉は明確に、ペネロペイアが「家を出ること」すなわち妻が新しい夫の家に住み、再婚後のオデュッセウスの家はテレマコスに委ねられることを意味していた。このあと彼女は再婚についてたびたび言及するが、それらの言葉はつねに夫方居住の結婚であることを強調している。それによってペネロペイアは、前述の最善の結果(1)——すなわち妻として帰還した夫を迎えるという可能性——を完全に失うが、しかし息子に対する求婚者たちの集団的殺意を極力緩和して、次善の結果(2)——すなわち彼にオイコスの資産を残すという今後の見通し——は十分確保できるのである。そして、じつはオデュッセウスが乞食姿に身をやつしてすでに館にもどっており、自分のすぐそばにもかかわらず、その事実を知るよしもない——あるいは、夫の直近の帰国を示唆するさまざまな発言や予兆に接しても、それらを確かめるすべのない——彼女からすれば、これ以上の再婚の引き延しが招く大切な息子を失うという最悪の結果に対する差し迫った恐れのほうが、20年間も不在だった夫がまもなくもどってくるという不確実な見込みよりもはるかに大きいと思われるであろう。

求婚の第三段階——弓競技の意味

求婚者たちの動向の第三段階は、このペネロペイアによる再婚の決意表明とともに始まる。彼女の思惑どおりに、彼らはすぐさま豪華な贈り物で互いに競い合い (*Od.* 18.282-303)、合間でテレマコスを殺害するという計画も神の予兆にもとづいてほとんど放棄ないしは中断される (20.240-246)。ペネロペイアの側のこの新たな動きにともなって生じた求婚者たちの見通しの変化については、第20巻において、彼らの一人で、比較的穏健な⁽¹⁷⁾アゲラオスがテレマコスにこう語っている。

「今はもう、オデュッセウスが帰らないことは明らかだ。
だからさあ、母君のもとへ行ってこう話しなさい。
最も優れた男で、最も多くの贈り物を与える人と結婚しなさいと。
そうすればあなたは、飲み食いしながら、
安楽に父の遺産を享受できようし、母は他家の世話をするだろう。」

(『オデュッセイア』 第20巻333-337)

前述のように成人したテレマコスが集会での発言や父の消息調査などの行動を起こす以前には、求婚者たちは妻としてのペネロペイアとオデュッセウス家の資産と彼の地位という三つの利点をめざしており、集会での「おまえは財産を握って、自分の館を治めるがよい」(1.402)というテレマコスに対する先述のエウリュマコスの反論も、相手がまだ子供で、家の財産の保全や管理の能力はあるまいと高をくくった発言であった。しかしこの第三段階の最初の時点では、彼らはもはやテレマコスを侮れず、オイコスの物的・人的資産に関しては彼に譲ることをはっきりと認めざるをえなくなった。エウリュマコスが無力な少年への脅迫のつもりで公然と口にした言葉が、暗殺失敗などのその後の思わしくない経過の中ではからずも現実になったのである。上のアゲラオスの発言は、そうした事態の変化についての正確な認識を示している。テレマコスに家のすべての資産を委ねて、ペネロペイアは——彼女自身が先に公言したように——館から出て再婚し、他家の妻となる。これが今後展開する彼女による夫の選択の新たな条件となる。しかし他方、エウリュマコスの前述の言動などからもうかがえるように、求婚者たちは、相手の家の資産の放棄とともにオデュッセウスの地位に相当するバシレウスの身分までも断念したわけではなかった。

この点に関してはとくに、ここでアゲラオスがテレマコスに対して、母には「最も優れた男で、最も多くの贈り物を与える人と結婚しなさい」(*Od.* 20.335)と告げるようにと述べている点に注目すべきであろう。何よりもまずペネロペイアの再婚相手は、他に抜きん出ている(「最も優れた」*aristos*)人物であるべきだと言われるが、この*aristos*という語は、具体的には英雄の資質として最も重要な *arete* ——すなわち勇気・武力・支配力といった男性の卓越し

た能力——を最高度に体現していることを指しており⁽¹⁸⁾、それゆえ求婚問題は今や、まさにそうした最高の男性的価値を有する卓絶した有力者——すなわち真のバシレウス——の選抜に向かっていると言える。もちろん、*aristos* はたんに血統や家柄の優位性も含意しうる語であるから、まったく一義的で明確な価値基準ではない。しかしいずれにしても、「*aristos* であること」が結婚相手の選定基準としてあらためてここで確認されており、そして——その重要な語句の意味が多義的であるからこそ——それがはたして正確には何を意味するのかは、むしろこのあとの物語展開が明らかにするものとなる。

またアゲラオスは同時に、再婚相手は最も資力のある（「最も多くの贈り物を与える」）人物であるべきだとも語っている。すでに結婚の対象となるペネロペイア自身が、以前からたびたび——あるいはとくに再婚の決意表明の直後においても——求婚者たちに対して「見事な贈り物」を熱心に求めていた（*Od.* 18.274-280）。それは、家産の漸次的減少の被害を補う女性の知恵であるのみならず、彼女との結婚が求婚者側の財力の差異というやはり公的な評定に関わることも密接な関係にあるだろう。ペネロペイアとの結婚は、富力の点でも最有力者としての地位の評価を左右するものであり、そのことを彼女本人も、また求婚者たちも求婚の前提としてはっきり認識しているのである。たしかに求婚者たちの多くはイタカ周辺の有力貴族であり、物語中ではしばしばバシレウスと呼ばれるが（1.394, 8.41, 18.64, etc.）、しかし彼らの誰もオデュッセウスに代わる卓絶した有力者としての社会的評価を定着させていない。こうして前掲のアゲラオスの言葉は、ペネロペイアの再婚表明によって、求婚の事態の重点がオイコスのみに関わる彼女自身の選択の問題から離れて、より広い社会的次元の問題、すなわち彼女の夫となるべきバシレウス中のバシレウスに最もふさわしい人間は誰かという男性世界——あるいは英雄世界——における公的な競争の問題へと移行したことを示しているのである⁽¹⁹⁾。

求婚の問題は、こうしてペネロペイアの再婚の意志表示によって、オイコスの範囲内の事柄からその外部に開かれた争点となっていく。そしてこのあと彼女は再婚相手の選定のために弓競技の開催を告げ、やがて試合の終わり近くで中心舞台から退くが、しかし彼女は自分の新たな動きが促すそうした事態の意味合いを十分把握していた。通常求婚に関する神話では、父親が娘の結婚相手を選ぶために競技などの試練の機会を設け、その進行を取り仕切る。だがペネロペイアの場合は、実父イカリオスのもとに帰って再婚相手を決めるという方法は採用されず、また成人した息子を正式の後見人にして再婚手続きが進められるのでもなく、彼女自身が最初主催者の役割を果たし、みずから勝利の目的とする競技を自発的に提案する。すなわち第21巻のはじめでペネロペイアは、求婚者たち全員に対してこう宣言している。

「わたしの話を聞いてください、勇ましい求婚者の方々よ、
あなた方は長年不在の男の館に入りこみ、
いつまでも果てしなく飲み食いしているが、

わたしを娶って妻にしたいと言うだけで、
 ほかの説明をすることができなかった。
 しかし求婚者の方々、さあ、今日の前にその賞品があります。
 わたしはここに神のごときオデュッセウスの大きな弓を置きましょう。」

(『オデュッセイア』第21巻68-74)

弓競技を提案した彼女の意図は、求婚者たちを贈り物で競わせた思惑の一つとも通じ合うものである。それは、妻としての自己の類まれな価値をめぐって男たちの注意を引き寄せ、彼らの競合を促すと同時に、その競争をオイコスを越えた公的な広がりの中に置くことである。ここでペネロペイアは求婚者たちに向かって、何の効果もない「飲み食い」以外に自分を妻にできる卓越した力の根拠を公然とした競技の場で明示するよう強く要求——あるいは叱咤激励——する。そうした事態は、彼女自身が競争の目的（「賞品」aethlon）になるとともに、弓試合を主催する権威的な立場にたつことによって成立している。

他方、こうして弓競技の宣言が男性間の競争をオイコス内部から外部の社会的広がりへと一気に押し出すことを告知するものであるならば、妻としてのペネロペイア獲得の競争は、その社会的評価の射程において、外から侵入してオイコスを占領している求婚者たちのみならず、オイコスの成員である不在の夫オデュッセウスと、さらには息子テレマコスをも巻き込まざるをえないことを意味している。そのことは、すでに第18巻で女神アテナが彼女に求婚者たちの前に出ていくよう促したときに前触れされていた。

このとき輝く眼の女神アテナは、イカリオスの娘
 思慮深いペネロペイアの心に、求婚者たちの前に
 姿を現わす気持ちを起こさせた。
 それは彼女が、求婚者たちの意欲をおおいに広げるためであり、
 また夫と息子からも、前よりいっそう尊ばれるためであった。

(『オデュッセイア』第18巻158-162)

なぜペネロペイアが求婚者全員の前に出ることが、彼女が「夫と息子からいっそう尊ばれる(timeessa)」——すなわちこの二人の身内の男たちによって自分の「値打ち」(time)をより高く評価される——ことになるのか。それはもちろん、そうすることで「求婚者たちの意欲がおおいに広」がるから、つまり彼女に対する他者の所有願望が最大限に拡大するためである。ペネロペイアの獲得に対する衆目の度合いが強まれば、本来の夫——彼が館にいることを当然女神はよく知っている——と息子さえも彼女の「公的」価値をあらためて認識し、彼女をめぐって激化するはずの競争の動きに真剣な注意を払わねばならない⁽²⁰⁾。他の男たちから見た

ペネロペイアの価値が極限まで高まるということは、同時に彼らの間での争いもまた極度に達することを意味するのであり、最終的にその競争に勝ち抜いて彼女を妻にした者には、最大の社会的評価が与えられることになる。もしもそのような状況になりながら、夫も息子も競争に何ら関与しないまま事が運ぶならば、たとえ「神のごとき」オデュッセウスでも、またその血縁の息子テレマコスでも卓絶した有力者（バシレウス）の地位を保つことは危うくなるかもしれないのである。

それゆえ先を見通したこのアテナの行動の描写では、やがてペネロペイアが開催を宣言して始まる弓競技にはオデュッセウスとともにテレマコスも何らかの形で加わり、実力にもとづいて各自の公的地位の根拠を明らかにするであろうことがすでに暗示されているが、しかしここで予示された状況は、その後求婚者たちには好都合に展開せず、むしろ競技開催の情報を先に得たオデュッセウスとテレマコスのほうに有利に働くことになる。第19巻の最後の場面でペネロペイアから弓競技の計画について打ち明けられた乞食姿のオデュッセウスは、自信を秘めた冷静な口調で「お館でのその試合を引き延しなさらぬよう。／彼らが磨き抜かれた弓を取って／弦を張り、斧的的を射通すまえに、／知謀に富むオデュッセウスがここに帰ってくるでしょうから」と語っている（*Od.* 19.584-587）。また第21巻における母親による弓競技開催の宣言のあと、テレマコスは求婚者たちに向かってこう発言している。

「何ということか。クロノスの子ゼウスはたしかにわたしを狂わせたらしい。
賢明な女性だとはいえ、大事な母が
他の男に従ってこの館を去ると言っているのに、
わたしは無分別にも笑って、喜んでいるのだから。
さて求婚者の方々よ、始められよ、目の前にその賞品が置かれたからには。
これほどの女は、アカイアの国にはおるまいし、
聖なるピュロスにもアルゴスにもミュケナイにも、
このイタカにも、黒い本土にもいるまい。
それにあなた方もそんなことは承知であり、わたしが母を褒める必要などあるまい。
さあ、口実を述べて先延ばししたり、弓を張るのに
これ以上ためらわないでいただきたい。われらは結末を見たいのだ。
わたし自身もまた、この弓を試してみようと思っている。」

（『オデュッセイア』第21巻102-113）

この場面でテレマコスがうっかり笑いを漏らしたのは、すでに再認を遂げて近くにいる父親が、やがて求婚者たちの勝負に加わって勝利することを確信しているからであろう。また彼が自分の不適切な笑いを取り繕いながら、ことさら「母が／他の男に従ってこの館を去る」こと

に言及しているのは、オデュッセウス家の主人の後継者として母親の結婚の条件を是認する態度をはっきりと示し、求婚者たちに競技への参加を強く促すためである。さらに彼は、母親が世にも稀な価値を有する女性であり、その獲得が絶大な名誉を保証するものだと強調して、みずからも弓競技に加わる意志を表明する。

言うまでもなくテレマコスの念頭にあるのは、この絶好の機会をとおして、将来バシレウスになりうる力量をオイコスの内外に認めさせることであるが (Cf. *Od.* 21.114-117)、しかしこのあと彼は、すみやかに12の斧の標的を地面に設置し、早速弓を取って弦張りに挑むと、その試みがもう少しで成し遂げられようとした瞬間に、父から合図を受けて中断する (21.118-129)。このときテレマコスは、強弓を何とか張れる力が父親によって認められただけで十分であると察知したのであろう。決定的な成功を父に譲る分別は、すでにテレマコスには備わっていた。彼の率先した行動は、まずは求婚者たちの意欲を煽るためだけに押しとどめられる (Cf. 21.130-135)。

こうしてペネロペイアによる弓競技の設定により、彼女をめぐる求婚の様相は、これまでの財政的でいくぶん個別的な贈り物合戦から、男性社会における各自の戦闘的能力に関する公然とした争いへと一変する。それは、経済力の競合以上に社会的名誉を大きく左右する競争であり、オデュッセウスの館に集った者全員がそのことを認識している。求婚者の中で最初に弓を取った者はレオデスである。彼は弦張りに失敗したあと、こう述べている。

「お仲間の方々、わたしには張れない。これは別の者が取ってくれ。

この弓は、多くの最も優れた方々の命と魂を

奪うであろう。というのも、毎日ここに集まって、

いつまでも待ち続けてきたものを得ることに失敗して生きていくより、

死ぬほうがはるかにましなのだから。」 (『オデュッセイア』第21巻152-156)

弓競技は、たしかに命取りになりうる実際の戦闘とは異なるたんなるゲームにすぎない。それゆえこのあとレオデスは、弓張りを試して力量を悟った者——すなわち敗れた者——は誰かほかの女に求婚すればよいと言っている (21.159-161)。しかし実際に敗れた直後に彼がここで強調しているのは、たとえゲームにすぎなくとも、「最も優れた者ら」(aristees)がこの競技に挑んだ場合、その敗北のために生じる損失が「命と魂」(thymos kai psyche)を奪われるのに匹敵するということである。敗北によって失われる「命と魂」とは、「最も優れた者ら」にとってはもちろん名誉という社会的評判であり、だからこそ、それを逸すれば——実際に死ななくても——「生きていくより、／死ぬほうがはるかにまし」なのである。この物語において求婚者たちは、全般的に身分は高くても道徳的に腐敗しているように描かれているが、そのような彼らにおいてさえ、『イリアス』で語られた戦闘の零和ゲーム——すなわち戦って死

ぬか生きるか——の英雄的倫理観⁽²¹⁾は生きている。というよりむしろ、ここでは道徳的に問題のある彼らの一人の言葉であるだけに、いっそうペネロペイアとの結婚のための弓競技の特徴が浮き出ている。

上のレオデスの失敗後の言葉ではまた、彼が競技の目的であるペネロペイア獲得の権利を失ったこと自体についてはとくに悔やんでいない点も興味深い。弓競技の開催決定以後の求婚者たちの関心はもっぱら、めざす花嫁そのものよりは、むしろその勝負に勝てるか否かの問題のほうに向けられているように思われる。そうした男たちの心の動きは、ある意味で、例えば『イリアス』第12巻においてサルペドンが英雄の死と誉れについて語っていた言葉の趣旨と通い合うものであろう⁽²²⁾。サルペドンの言葉では、戦場で戦う英雄にとっては、約束された戦勝の報酬そのものよりも戦闘における生か死かいずれかの必然的結果のみが重要であった。弓競技においても求婚者たちは、そのような一種の零和ゲームに直面し、栄光を得るか失うかの勝負に挑むこととなった⁽²³⁾。彼らの各々は、自分が弓を引いて的を射ることができ、そして他の誰もが失敗すれば、ペネロペイアが体現する最高の誉れを得ることができる。しかし誰もそれができなければ、栄光は強弓の所有者であり、かつてそれを自由に操った——が今は不在の——オデュッセウスに与えられるだろう。求婚者たちはこれまでの贈り物合戦の場合と同様に各々互いを相手として闘うとともに、弓の主であるオデュッセウスを最大の敵とする勝負に挑むことになったのである。実際、ペネロペイアによる弓試合開始の言葉を受けて、求婚者アンティノオスは「この磨き抜かれた弓を張るのは容易ではない。／ここにいる全員の中には、オデュッセウスほどの者はいないのでな」と述べ (*Od.* 21.93-94)、この試合での最強の競争相手が誰であるかを明らかにしている。

レオデスのあと、求婚者たちは次々と弓張りを試すが、成功する者は誰もいない (*Od.* 21.184-185)。そこでついに首領格の一人エウリュマコスも挑戦し、やはり失敗に終わる。そしてそのときの彼の言葉もまた、競技の性格をよく表わしている。

「おお何たることか。わたしは自分のためにも、またきみらみなのためにも心苦しい。
無念ではあるが、わたしは結婚のことでさほど歎くわけではない。
アカイア人の女は、この海に囲まれた
イタカにも、ほかの町にもたくさんいる。
いやむしろ、われらが弓を張れぬために、神のごときオデュッセウスよりも
これほど力に劣るということになるとすれば——
それを聞いて、のちの世の人々も不名誉と思うであろう。」

(『オデュッセイア』第21巻249-255)

エウリュマコスは、ペネロペイアとの結婚それ自体を逸したことよりも、試合で敗れた結果の

ゆえに遠い将来まで末長く残る「不名誉」(elenkheie)のほうが重大であることを率直に認めている。もしも結婚だけが目的ならば、ほかに多くの女性がギリシアにはいる。しかしここにいたって彼がペネロペイアとの結婚にとくにこだわる理由は、他の多くの男たちが彼女を妻に求め、その競争的状况が、彼女自身から離れた男性社会において、勝利の名誉といういっそう魅力的な価値を創りだしているからにほかならない。弓競技は、その名誉という最も貴重なものを得るか失うかの真剣勝負である。もちろん求婚の最初の原因は、ペネロペイア自身の女性あるいは妻としての価値——すなわち卓越した美しさ、思慮深さ、貞節、あるいは織物の技に象徴される家の繁栄など——であろう。そもそもそうした具体的な——そして前述のようにオイコスの社会的評価とも結びついた——美点がなければ、彼女がそれほど多数の求婚者を引き寄せることはなかっただろう。しかしペネロペイアへの求婚をめぐる事態は、彼女自身や彼女が直接関わる家政上の価値を越えて、外部の男性世界、ひいては対等の身分の男たちによって構成される共同体(ポリス社会)における地位の差別化の問題へと発展している。物語において、このプロセスの大きな転換点が男性的能力を試す弓競技である。

競技はエウリュマコスの失敗のあと、アンティノオスの提案によって中断され、残りは翌日に延期される。そのとき、乞食姿のオデュッセウスが弓張りを試すことを申し出ると、アンティノオスがそれを強く阻もうとし、さらにエウリュマコスも反対して、乞食の男を弁護して申し出を許そうとするペネロペイアに向かって言う。

「イカリオスの娘、思慮深いペネロペイアよ、
われらはこの男があなたを連れていくとは思いません。それはありえぬことです。
ただわれらは、世の男たちや女たちの話を恥じるのです、
誰かほかのくだらぬアカイア人がこう言わぬかと。
『あの優れた人の妻に求婚している者たちは、
はるかに劣った男らで、磨き抜かれた弓を張ることができない。
ところが流れ歩いてきた誰か別の乞食男が、
いともたやすく弓を張り、斧を射通したのだとさ。』
このように言うだろう。これはわれらにとって不名誉となりましょう。」

(『オデュッセイア』第21巻321-329)

この発言のまえにペネロペイアは、万一乞食の男が弓を張って的を射たとしても、自分が彼の妻になることはまったくありえないと断言していた(21.312-319)。しかしここでエウリュマコスが正直に述べているのは、弓競技がもはやペネロペイアのみを目的とする争いではないということである。もしも見知らぬ最下層身分の乞食が弓の技に成功したとしても、はなはだ身分違いであるため、その男がペネロペイアと結婚することは実際起こりえないだろうし、エウ

リュマコスもそのような懸念は一切抱いていない。彼の一番の気掛かりは、そうした万一の場合に、彼女が他人によって「連れてい」かれるということよりも——つまりペネロペイアの身の行方よりはむしろ——乞食男が首尾よく弓を操った結果、自分たち自身がこうむる「不名誉・恥辱」(elenkheie)のほうなのである⁽²⁴⁾。エウリュマコスにとって、前述の引用(21.249-255)のように、自分がしくじって英雄オデュッセウスより劣ると評価されるだけでも、十分に耐えがたい後世までの「不名誉・恥辱」(elenkheie)である。ところが貴族よりはるかに身分が劣り、またそれゆえに力も劣るはずの物乞いの浮浪者が成功したなら、それこそ奈落に落ちた気分となろう。彼が身分の低い「くだらぬアカイア人」の噂話として想像している自己に関する不評の言葉は、まことに真実味を帯びている。

一方このエウリュマコスの言葉に対するペネロペイアの反論は、みずからが口火を切った弓競技という男性的競争についていっそう正確な認識を示唆している。彼女は——おそらく自分との結婚それ自体よりも世の評判を気に掛けるエウリュマコスの発言に対して、女性として反発を覚えたのでもあろう——再度弓を乞食男に渡すように催促して、次のように言う。

「エウリュマコスよ、優れた人の館をむさぼり

辱めている者らに、国での良い評判などありえないでしょう。

あなた方は、どうしてそんなことを不名誉と思うのですか。

この客人は体も大きく頑丈で、

生まれも立派な父親の息子だとはばかりなく口にしてはいる。

さあ、磨き抜かれた弓をこの人にお渡しなさい。どうなるか見てみましょう。

ここではっきり申しませう——それはかならず果たして見せます。

もしこの客人が弓を張り、アポロンが願いをかなえたなら、

わたしはかれに上着と肌着の見事な衣服を着せてやり、

犬や男らから身を守るための鋭い槍と

両刃の剣も与えませう。」

(『オデュッセイア』第21巻331-341)

ここでペネロペイアは、弓競技の勝敗には自分との結婚以上に重要な貴族の男たちの名誉がかかっているという上述のエウリュマコスの言葉を前提としたうえで、その名誉が高い身分の者たちの間で争われるがゆえに卑賤な男の介入によって毀損されてはならないのだとすれば、求婚者たちは館での卑しい振る舞いのために、すでにそうした名誉を求めするための条件を失っていると鋭く指摘する。一方同じ論理によって、乞食男にしても、弓張りを試すにふさわしいたくましい体を持ち、みずからは高貴な生まれを主張してはいても、現状は最低身分の人なのだから、自分を妻とすることはおろか、相当な地位にあってはじめて希求しうる名誉を得るべくもなく、したがって試合の敵対者となって敗れた他の挑戦者の名誉を損なうこともありえない

だろう。求婚者たちと乞食男はいずれも弓競技においては最高の褒賞にはあずかれないという彼女の逆説的な論法は、弓競技が対等な貴族身分の男たちの間でのみ成立しうるものであり、それゆえにこそ生命に匹敵する大きな価値（名誉）を賭けた勝負であるという英雄的零和ゲームの本質に対する正確な理解を示している。こうして彼女は、乞食男の試みとその結果が名誉についての貴族同士の競争とは何の関係もないことを証拠づけるため、自己の裁量によってこの男の身分にふさわしいまったく別の褒美を確約する。

さてこのペネロペイアの発言は、そのように試合の性質をいっそう正確に示すことによって、やがて正体を現わしたオデュッセウスの行動の意味を明らかにしている。弓張りに挑んだ乞食の男がじつはこの英雄自身にほかならないとわかれば、彼が加わった弓競技は、彼女が今否定したこととはまったく逆転した様相を帯びざるをえず、それは一転して、まさに対等の貴族同士による名誉をめぐる真正の闘争となるであろう。一方、弓競技の結末が意味するものをあらためて示した中心的女性のペネロペイア自身は、この最終的段階のまえに争いの場から退いていく。彼女は乞食男の手に弓を握らせる役割を果たした時点で、みずからを褒賞として設けた競技でありながら、しかし自分以上に価値あるものを目的とすることが明白となった男性世界の勝負の舞台からは、必然的に姿を消さねばならないのである。彼女はそれと意図せずしてオデュッセウス登場の機会を作り、再び——そして今度こそはや抜き差しならぬ——男性世界の白熱した戦いの火蓋を切ったのち、ちょうど『イリアス』に描かれたヘレネと同様に⁽²⁵⁾、男たちの生死の争いの場から遠ざかっていく。実際、上述の彼女の発言のあと、母親の出番はもうここまでと察したテレマコスが、弓をめぐる客人の扱いについては男性である自分にこそ権限があると主張すると、ペネロペイアはそれに従っておとなしく女部屋に引き上げていくのである（*Od.* 21.343-355）⁽²⁶⁾。ここで求婚をめぐるゲーム——すなわち重大な名誉はかかってはいても、現実には生死そのものは左右されない零和ゲーム——としての弓競技は——まだ予定ではアンティノオスらの挑戦者は残ってはいるが——実質的には終了したと言える。なぜなら、乞食男として弓を取ったオデュッセウスは、そのあとたやすく弦を張ってすべての的を射抜くと、たちまち真の姿を現わして求婚者たちを射殺し始め（21.404-22.30）、事態は本格的な武力闘争へと突入していくからである。

求婚者殺戮

乞食男に変装して自己の館に潜入していたオデュッセウスが弓競技への参加をとおして変貌し、やがて求婚者たちとの戦いへと進んでいくプロセスは、『オデュッセイア』の物語のクライマックスであるとともに、英雄のオイコスの再建が外部社会の構成とどのようにつながっているかを示す重要な局面をなしている。そのダイナミックなプロセスにおいて、まずオデュッセウスと求婚者たちの関係は、三段階の変容を通じて変化していく⁽²⁷⁾。

その最初の段階は、乞食の男が弓矢によつて的を命中させる場面である。男は強弓を手に

取って点検すると、平然とした態度で弦を張り、そのあと一本の矢をつがえて12のすべての斧の穴を貫く (*Od.* 21.404-423)。そのとき、彼が弓を取る様子を見ていた求婚者たちは、互いに次のように言い合った。

「こいつにも幸いな目に遇わせてやりたいものだが、
そんな見込みは、こいつがこの弓を張れる見込みと同じくらいだ。」

(『オデュッセイア』 第21巻402-403)

求婚者たちにとっては、乞食男は最下層の身分の人間であるかぎり、強い弓弦を張れるわけではないと思われる。その信念はここで、彼が首尾よく弦を張って射的を射抜く可能性は無に等しいから、彼は「幸いな目に遇う」 (*onesios antiaseien*) ことはできまいという冷笑的な言葉で表現されている。ここで用いられた *onesis* という語はホメロスの作品では他の個所には現われないが、この場面での当てに成功したオデュッセウスがすぐに敵の一人を射殺したとき、求婚者たちは「もはやおまえはほかの競技には出られ (*aethlôn allôn antiaseias*) ないぞ」 (22.27-28) と罵っており、したがって「幸運な目」 (*onesis*) とは具体的には、どんな競技にも他の有資格者たちと対等に参加できるような安定した身分にもとづく社会的特権と生活の繁栄を指すものと考えられる。乞食男はこのように、実際に弓を張るまえにはとりわけ求婚者たちとは身分が異なるきわめて低い地位の者として蔑まれていたが、弓張りや射的の達成によって必然的に求婚者たちとほぼ対等の地位へと上昇することになる。これは、先のエウリュマコスとペネロペイアの対話においてはありえないこととして想像されていたが、しかしある意味ではそのときすでに準備されていた成り行きであろう。

弓競技の予想外の成功は、同様に想定外の乞食男の地位上昇をもたらす。しかしこの時点では、彼はまだ求婚者たちと対等の地位に昇ることができただけにすぎない。すなわち、彼はオデュッセウス家の客人 (*クセノス*) として彼らとほぼ等しい待遇を受ける資格を得ることができたが、しかし前述のペネロペイアの約束に従って、弓競技の勝利により彼女を妻として得たのでも、また最大の価値ある名誉を獲得したのでもないからである。もしもこのあとに続く行動がなければ、乞食男はたんなる一客人として、ペネロペイアから衣服と槍と剣の贈り物を与えられ、立派な風采と相応の敬意を得ただけでどこかよそへ立ち去る人物として描かれるほかなかったであろう (*Cf. Od.* 21.339-342)。

乞食の客人がオデュッセウスであるとしだいに判明し、彼が弓競技の勝利の栄光を確実に手に入れるのは、じつは競技終了後の武力戦においてであり、それは彼の変貌の第二・第三段階にあたる。その第二段階では、まず乞食男は襤褸着を脱ぎ捨て、弓矢を構えて求婚者たちにこう告げる。

「この危険のない競技はもう終わった。

しかし今は、どんな男も射たことのない的をうまく射当てて、
アポロンがわたしの願いをかなえてくれるか見てみよう。」

(『オデュッセイア』第22巻5-7)

「危険のない競技 (aethlos aaatos) はもう終わった」という言葉は、求婚者アンティノオスが豚飼いエウマイオスに弓を彼らのそばに置いていくよう指図したとき、「これは求婚者たちにとって危険のない競技 (aethlos aaatos) にすぎぬ」(21.91) と漏らしたことを受けており、ここまでは——彼らもそう受けとめていたように——生死にかかわらない競技だったが、このあとは彼らの予想を越えて、生か死かいずれかの結果をもたらす勝負、すなわち戦闘の零和ゲームになることを示している⁽²⁸⁾。そしてこう言うとともに男は、今度はアンティノオスに狙いを定め、一矢で彼を射殺するが、しかし求婚者たちは、それでもまだ相手が何者かわからず、「異国の男よ (xeine)、人を射るとはひどいことだ」(22.27) と呼びかけ、「イタカに住む若者の中でもとくに優れた男を殺したからには、おまえを秃鷹の餌食にしてやる」と威嚇する(22.29-30)。男が求婚者たちに対してはじめて自己の正体について言及するのは、そのときである。

「この犬どもめが、おまえらはこのわたしが、トロイアの国からもう帰国せぬと
思っていたのだろう。おまえらはわたしの館を荒らし、
家の女たちにむりやり共寝をさせ、
わたしが生きているのに、ひそかに妻に言い寄ったであろう、
広き天を治める神々を恐れず、
またのちのちに受けるべき人の世の義憤をもはばかることなく。
今やおまえらはみな、破滅の綱で縛られているのだ。」

(『オデュッセイア』第22巻35-41)

ここでは、男はまだはっきりとは名乗らず、自分が相手の予期に反して「トロイアの国から帰国」したと述べて正体を強くほのめかす。そしてこの第二段階の男の変容すなわち求婚者たちに対する第二の再認場面においては、彼の留守中に彼らが犯した罪業として挙げられる事柄が、家産の消費と女奴隷との密通と人妻に対する求愛という彼自身のオイコスに対する不当な行為に限られている点に注目すべきだろう。オデュッセウスは第一段階では高貴な客人格の人物として新たな姿を現わしたが、この第二の段階では長らく不在であったオイコスの主人として再認される。しかもこの第二の再認の真实性は、すでにアンティノオスを彼が殺したように、明確な言葉による名乗りによってではなく、むしろ激しい怒りの感情と明白な力の行使に

よって証拠づけられる。乞食の男は、まず弓競技の成功によって侮れぬ客人に変貌し、次に求婚者たちに対して、「危険のない競技」の終焉と戦場の零和ゲームの開始を実際の攻撃的行動で明示することによって一族の主人たる地位を回復しようとする。

この第二の告知の言動によって、求婚者たちもようやく相手の正体に気づき始める。突然の死の恐怖に襲われた彼らの中で、エウリュマコスのみが応答してこう述べる。

「ここに帰っているあなたが、まことにイタカの人オデュッセウスであるのなら、
今言われたこと、すなわちアカイア人らが館や農地でなした
すべての無法な行ないについてのあなたの言い分は正当だ。」

(『オデュッセイア』第22巻45-47)

この言葉においてエウリュマコスは、まだ——相手が名乗っていないからには——十分確信してはいないけれども、まず「イタカの人オデュッセウス」と身元と名前を述べ、そうして相手はその人物と仮定したうえで、彼の家屋敷における自分たちの「無法な行ない」(atasthala)を全面的に承認する。すなわちここで弓を手にした客人は、求婚者たちによって一家の主として再認される。しかしこの第二の再認において、エウリュマコスは罰を恐れるゆえに言い逃れしようとして、このあと余計な言葉を加えてしまう。

「しかしそれらすべての原因となった男は、すでに倒れている。

つまりアンティノオスだが、この男こそ、それらの仕業の口火を切ったのだ。

かれは結婚を望んだとか求めたとかいうよりも、

じつはほかのことを考えていて、クロノスの子はそれを成し遂げなさらなかった。

それはよき造りのイタカの国で、みずから王たらんとする目論みだった。

他方かれは、あなたの息子を待ち伏せして殺そうと企んでもいた。

その男が報いを受けて討たれた今、どうかあなたの民を許していただきたい。

またわれらとしては、館で飲み食いした分すべてを

国中から取り立てて弁償しよう。

めいめい別々に牛二十頭分の値打ちの

青銅や金も届けよう、あなたの心が和らぐまで。

それまでは、怒りをこうむってもしかたがない。」 (『オデュッセイア』第22巻48-59)

エウリュマコスはここで、一切の責任をアンティノオスに転嫁し、ただ一人彼こそが「イタカの国でみずから王たらんと」企てていたと述べるが、この「王(バシレウス)たらんとする」(basileuoi)という言及は、前述のように最もオデュッセウスの怒りを誘う言葉であり、実際

彼はこのあと、いっそう憤りに駆られて求婚者たちに対する全面的攻撃を開始する。求婚者の発言がオイコスに関する問題からバシレウスをめぐる事柄に及んだこのときオデュッセウスは、求婚者の一人として弓競技に参加し、ペネロペイアに対してことさら自分の失敗の「恥辱」(elenkheie)を強調していたエウリュマコスにも、さらにはほかのどの求婚者にも同じく「王(バシレウス)たらんとする」意図があったことを確認する。バシレウスであること、すなわち卓絶した有力者の地位は、本来なら弓競技によって決せられ、その至難の試合の勝者はイタカの最有力者になりうるための最高の名誉を得ることができたはずである。しかしその勝負はじつは、乞食の男が弓張りとの的当てに成功することによって目的に達せずして終わってしまった。なぜなら、乞食の客人として競技に加わった人物に与えられる褒賞は、ペネロペイアなる妻の獲得にともなう最大の誉れでなく、たんに客人としてのより高い待遇にすぎなかったからである。オデュッセウスはオイコスの主人の地位と並んで、バシレウスたるにふさわしい名誉を、なお自己の力の顕示によって——すなわち公然たる形で——あらためて獲得せねばならなかった。その試練は、彼が一家の主人であることが告げられた今、さらに彼がオデュッセウスという英雄の最も本質的な部分をも回復するための条件として残っているのである。

こうしてエウリュマコスの言葉は、乞食であった男の第三の変貌、すなわち求婚者たちとの関係における第三の再認へと導いていく。その助命の嘆願とも受け取れる言葉を聞いた客人は、「顔つきを陰しくして」こう言い放つ。

「エウリュマコスよ、たとえおまえらが償いとして、父祖の資産のすべてを、
またおまえらが今所有するものに、どこかから工面したものを加えて差し出そうと、
おまえら求婚者に罪業のすべてを償わせるまでは、
けっしてわたしは殺戮の手を控えはせぬぞ。
今やおまえらの前にあるのは、堂々と立ち向かって戦うか、
それとも逃げるかということのみだ——もっとも死の運命を免れうる者がいるならばだが。
しかし残酷な死を免れうる者は、おそらく一人としておるまい。」

(『オデュッセイア』第22巻61-67)

『イリアス』に描かれる戦闘においては、英雄がこれから殺そうとする——あるいはすでに致命傷を与えた——敵から助命や遺体返還の嘆願を受け、それを無慈悲に拒絶する場面が多い。例えば『イリアス』第22巻では、アキレウスが死に際のヘクトルから「多額の青銅と黄金」と引き換えに遺体を親元に返してくれと嘆願されたとき、次の言葉を投げかけている。

「この犬めが、膝や両親とかにかけてわたしにすぎるのはやめろ。
わたしはこの力と憤怒に駆られて、

おまえの体を切り刻み、生のまま食らいたい。それもおまえの所業ゆえだ。
 おまえの首を野犬から守ってくれる者などおらぬ。
 両親が十倍いや二十倍もの身代金を
 ここへ持参し、またもっとほかの物を約束しても、
 あるいはグルダノスの子孫プリアモスが、おまえの体と同じ重さの黄金で
 遺体を引き取りたいと願い出ても、おまえの母堂が
 みずから生んだおまえを寝床に置いて歎き悲しむことはあるまい。
 いや、おまえの全身は、野犬と野鳥がむさぼり尽くすだろう。」

(『イリアス』第22巻345-354)

ヘクトルの嘆願に対するこのアキレウスの言葉は、親の資産などから調達されうる莫大な代償品をきっぱりと拒否し、敵の生命を確実に無に帰そうとする激しい怒りの様相において、求婚者に対するオデュッセウスの厳しい返答ときわめて似かよっている⁽²⁹⁾。乞食男から高貴な客人へ、そして客人から世帯主へと変容したオデュッセウスは、ここで最終的に『イリアス』に描かれた戦闘的英雄に変貌し、自己の全体像を明らかにしていると言えるだろう。ただし上述のアキレウスの言葉が、すでに彼が宿敵ヘクトルを打ち倒し、最大の英雄としての誉れを獲得したあとに述べられたのに対して、大きな名誉を確保して——一家の主人の地位とともに——バシレウスの地位を取りもどすためのオデュッセウスの戦いはまだこれからである。前述の戦闘的英雄としての自己表示——すなわち第三の再認——のあとには、その自己表示の内容を実際に証明すべき戦いが開始されねばならない。エウリュマコスここではじめて、オデュッセウスがすでに告知していた「危険のない競技」の終焉を完全に理解し、次のように号令して戦闘態勢を整える。

「仲間たちよ、この男はもはや無敵の腕を控えはしまい。
 磨き抜かれた弓と矢筒を取ったからには、
 われら全員を殺すまで、滑らかな敷居から射続けるだろう。
 さあ、われらも戦いの喜びを思い出そう。
 剣を抜いて、早死にをもたらす矢を防ぐために
 食卓の前に立てよ。みなが一団となってかれに向かおう。
 敷居と戸口からかれを追い払い、
 町へ行って、大急ぎで大声を出して告げよう。
 そうすれば、この男が放つ矢もすぐに最後となるろう。」

(『オデュッセイア』第22巻70-78)

ここに相手を倒して名誉を得るか、それとも敗れて相手に名誉を与えるかの熾烈な戦場の零和ゲームが、双方ともそのルールに合意のうえで開始される。このあと第22巻においてオデュッセウスは、テレマコスとごく少数の忠実な奴隷たちと協力して百人を越える敵勢と対決するが、その困難な戦闘の最中に、親友メントルに変身して現われた女神アテナが英雄を次のような言葉で叱咤する。

「オデュッセウスよ、あなたにはもはやあの頃の気魄も力も残っていないのか、
高貴な父の娘、腕白きヘレネのために
九年もの間トロイア勢と絶え間なく戦い続け、
多くの男たちを恐ろしい戦闘で殺し、
あなたの計略で道広きプリアモスの都が落ちたあの頃の。
今、みずからの館と所領にもどりながら、
どうして求婚者どもと勇敢に立ち向かうのを歎いているのか。」

(『オデュッセイア』第22巻226-232)

こうして『オデュッセイア』では、物語の最高潮の場面において『イリアス』のトロイア戦争に類似した激しい英雄的戦闘が展開する⁽³⁰⁾。『イリアス』ではギリシア人の人妻ヘレネをめぐる戦いであったが、ここではオデュッセウス自身の妻ペネロペイアが戦勝の印となり、また戦争の進行にともなって、『イリアス』においてヘレネが男たちの武力衝突の場から背景に退いていったように、『オデュッセイア』でもペネロペイアは血の海と化した館の大広間から離れた場所に引き下がっている。中心的な女性の空間的な隔離は、男たちの戦闘がもはや彼女らのみが争いの目的ではないことを象徴しているのであり、いずれの物語においても最大の焦点となるは、戦闘的能力の差異によって決定づけられる勝利の誉れである。そもそも英雄的な戦闘とは、最初の目標が見えなくなっても、それ自体に内在する激しい活力と命を賭して戦勝を求める男性的な名誉の理念によって加速され、最終的な決着に達するまで限りなく拡大するものである。そしてとくに『オデュッセイア』の場合には、主人公がオイコスの主人たる資格のみならず、イタカの最有力者たるバシレウスの地位をも戦勝によって確保できるかどうか賭けられており、そのことは、戦場となった館内部での彼の戦闘態勢に反映している。

上述の女神の言葉が示すように、求婚者との戦いにおける最も強力な要素は英雄自身の武力と勇気である。それゆえ例えば主人公は、女神の言葉のあとに猛然と敵を攻撃し、「生き残って、命を賭けて戦う求婚者たちの中で武勇とくに優れた者ども」以外のすべての敵を「雨のごとく降らせた」矢によって射殺する (*Od.* 22.244-246)。しかし圧倒的な多勢を前にして、彼がその後の戦いを有利に展開できたのは、息子と二人の忠実な奴隷の加勢があったからでもある。第22巻においてテレマコスは、戦闘の開始以来父親と終始密接に連携して戦い、また豚

飼いエウマイオスと牛飼いピロイティオスは、武器の調達などの付随的役割を果たしているのみならず、実戦の場でも目立たぬながら英雄父子に協力している。したがってこの戦闘では、オデュッセウスは彼自身が最大の武勇を発揮して、真のバシレウスに値する人物であることを誰の目にも明らかにしようとするとともに、さらには——20年間の不在のあとゆえ信頼できる者は少数でありながらも——一家の成員の強い連帯を再び創り出し、彼らを有効かつ誠心をもって働かせる統率者の能力を示して、オイコス的主人たるにふさわしい人間であることをも実証しようとするのである。そして第22巻の求婚者殺戮が終了した直後の場面では、彼の最初の指示にもとづいて、テレマコスと求婚者たちと密通した女奴隷たちを全員絞首刑に処し、また敵に加担したメランティオスという男奴隷には鼻・耳・陰部・手足の切断という過酷な刑罰を科しているが(22.430-477)、そうした情け容赦のない行為もまた、求婚者たちとの戦いが対外的な地位の確保のみならず、対内的な権威の再確立をも目指すものであることを印象づけている。

むすび——オイコスとポリスの関係

主人公が求婚者たちとの名誉をめぐる戦闘に完勝すると同時に、その戦いとおして、奴隷を含む一族全体の人的結束を緊密に固めてオイコスの秩序を正常化する。『オデュッセイア』において『イリアス』的な戦闘が戦場という外部の開けた空間ではなく、オイコスの内部で繰り広げられるという特殊な状況は、そうした叙事詩全体の趣旨とも呼応している。『イリアス』に描かれたトロイアにおける英雄たちの生命を賭した零和ゲームの戦闘では、元来は対等の地位にある戦士たちの社会的評価の序列化をめぐる、戦勝の誉れが戦場という公開の場で競われた。アキレウスにせよ、ヘクトルにせよ、ポリスの社会の一員であるがゆえに、ポリスの外にある生死を決定する戦場での勝負に挑み、ついには社会集団の秩序を越えるみずからの価値を明らかにした⁽³¹⁾。一方『オデュッセイア』における求婚者たちとの争いは、最初は弓競技というオイコス内における対等の客人間の競合に始まるが、しかしそこには同じく社会的評価の序列化が目的として内在していたため、やがて武力による闘争に発展する。そのとき主人公が、ポリスの共同体の最有力者(バシレウス)としての榮譽を取りもどすための戦闘でありながら、戦いの空間をあくまでも館の中に限定し、オイコスの内と外を厳格に区切って事態に対処したのは⁽³²⁾、その戦闘が同時に、オイコス内の主人の統率力をも明らかにすべきものだったからであろう。

こうして『オデュッセイア』の主人公は、イタカの共同体(ポリス)の一員として戦場における『イリアス』の英雄的——すなわち男性間の競争的——理念を継承する人物であるとともに⁽³³⁾、危機に瀕したみずからのオイコスの再建するという新たな役割を担って登場している。この作品の後半では、それら二つの主題が、本来は競争と対立の場となるべきでないオイコス内での英雄的戦闘という矛盾を孕んだ状況の中で結びつけられ、詳細に語られる。そしてこの

複合的な闘争場面から読み取ることのできるのは、オイコスの秩序化とポリスの成員の序列化とを重ね合わせようとした詩人の意図である。

レッドフィールドが『オデュッセイア』論で述べているように⁽³⁴⁾、対等身分の貴族社会における人間の序列化を主題とする叙事詩が『イリアス』であるならば、『オデュッセイア』は主に、元来対等でない成員で構成される——すなわち親と子、夫と妻、主人と奴隷などの非対称の組み合わせからなる——オイコスの統一と秩序化について語る作品であろう。他方レッドフィールドはまた、『オデュッセイア』ではホメロスの時代のギリシア世界を反映して、オイコスがつねに外部世界の動き——すなわちポリスの政治や市場経済など——との大きな緊張関係の中で揺れ動く集団として描かれていると指摘している⁽³⁵⁾。オイコスの統率者は、もしも家政（オイコノミア）を安定的に運営したいと願うならば、必然的に外部社会の動向に深く関与して生活し行動しなければならない。人間世界のオイコスは、オデュッセウスが放浪中に体験したような異界の自律的で自己充足した集団ではなく、つねに外部の規制を受けつつ、またみずから外部に作用しながら存続する——不安定でもあり、また強力にもなりうる——小社会である。したがって、それを司る主人は自己のオイコスのみならず、それを取り囲むより広い社会を視野に置いて、両者の均衡の取れた関係を維持する必要があるのである。

物語においてオデュッセウスは、求婚者たちのすべてを殺すことによってオイコスの再建を果たす。それは、そうしてバシレウスの名誉と地位を明白かつ確実に取りもどすことによつてのみ、彼ははじめて世帯の安定と私財の保全を図ることができたからであり、この両者は択一的ではなく、上述のように詩人の時代のオイコスとポリスの関係を背景として見るならば、互いに密接に関連しているがゆえに両立すべきものであった。たしかに女性であるペネロペイアの場合は、家の外での活動は皆無に等しくとも、作品中ではしばしば貞節の誉れ（kleos）高い女性として讃えられている⁽³⁶⁾。しかし、女性（妻）は家族内での優れた操行によって世の賞賛を得ることができるが、男性であるオデュッセウスにとっては、誉れ（kleos）は世帯領域の外の世界での働きから生じるものであり、たとえ彼が特別に良き主人ないし夫であっても、オイコス内での善行や功績によってそれを得ることは不可能である⁽³⁷⁾。一族の存続と営みとを正常かつ円滑に堅持しうるには、その主人には社会的名望が必要だが、それはオイコスの外側の世界、すなわちポリス社会において確立せねばならない。それゆえ彼の求婚者殺戮は、オイコス回復の観点から見て英雄的人物がなしうる唯一の選択であった⁽³⁸⁾。

ただしその殺戮行為——すなわち戦闘の零和ゲーム——の結果、イタカのポリス社会に大きな動揺が生じたこともホメロスは見落とさずに語っている。物語はその後、第23巻でのオデュッセウスとペネロペイアの夫婦の再認、さらには第24巻でのオデュッセウスとラエルテスの父子の再認へと続き、同巻の終わり近くでは、求婚者たちの親族による復讐の武力闘争が発生する（*Od.* 24.412ff.）。このとき老父ラエルテスさえも武装して、双方ともに対決の構えを取るが、しかし作品の最終場面では、その乱闘は女神アテナの介入によって突然停止され、双

方が不戦の誓約を交わすという事態への言及で締めくくられる。

この第24巻の和解を示唆する場面には、『イリアス』第24巻のアキレウスとプリアモスの会話のような敵対した集団を代表する人物間のやり取りはまったくなく、読者（聴衆）は悲劇のデウス・エクス・マキナの場合のように不自然な結末を感じるであろう。しかし、このあまりに理想化された結末もまた、詩人の意図的な技法によるのかもしれない。なぜなら誰もが、実際はこううまく解決するだろうかと首をひねり、むしろオイコスの状態がしばしば——例えばこのように客人関係を過度な仕打ちで蹂躪した世帯主に対する報復といった——外部社会からのネガティブな相互作用によって左右される場合もあるという——物語とはまったく逆の——社会的現実を思い浮かべたであろうと思われるからである。とはいえ、この点においてフィクションとしての叙事詩と歴史的現実とのいささかの乖離を読み取ることができたとしても、同時代の社会の様相を見つめて創作されたホメロスの詩が伝える文学的真実性は、さほど損なわれはしないのであろう。

（本研究は JSPS 科研費25370347 の助成を受けたものです。）

注

- (1) 小川正廣「ホメロスの環は閉じられない——古代叙事詩の再生をめぐる—— (1)」『名古屋大学文学部研究論集・文学』61 (2015), pp. 9-36.
- (2) Cf. M. Mueller, *The Iliad*, London, 1984, p. 181.
- (3) Cf. J. Griffin, *The Odyssey*, Cambridge, 1987, pp. 63-70; R. B. Rutherford, *Homer*, Cambridge, 1996, pp. 58-61; Id., The Philosophy of the *Odyssey*, *Journal of Hellenic Studies* 106 (1986), pp. 145-162; Id., From the *Iliad* to the *Odyssey*, *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 38 (1991-3), pp. 37-54 (reprinted in: D. L. Cairns (ed.), *Oxford Readings in Homer's Iliad*, Oxford, 2001, pp. 117-146).
- (4) Rutherford, From the *Iliad* to the *Odyssey* (art. cit. repr. 2001), pp. 120-121.
- (5) M. I. Finley, *The World of Odysseus*, 2nd ed., London, 1977, esp. ch. IV (フィンリー『オデュッセウスの世界』、下田立行訳、岩波文庫、1994年、とくに第4章)。
- (6) Cf. S. Scully, *Homer and the Sacred City*, Ithaca/London, 1990, pp. 45-46; K. A. Raaflaub, Homeric Society, in: I. Morris & B. Powell (eds.), *A New Companion to Homer*, Leiden/New York/Köln, 1997, pp. 629-630, 646; S. Said, *Homer and the Odyssey*, Oxford, 2011, pp. 364-365.
- (7) 注(1)参照。
- (8) 求婚者たちの行動と罪については、cf. S. E. Bassett, The Suitors of Penelope, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 49 (1918), pp. 41-52; H. L. Levy, The Odyssean Suitors and the Host-Guest Relationship, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 94 (1963), pp. 145-153; M. A. Katz, *Penelope's Renown: Meaning and Indeterminacy in the Odyssey*, Princeton, 1991, pp. 170-172; Said, op. cit., pp. 249-257.
- (9) A. Thornton, *People and Themes in Homer's Odyssey*, London, 1970, pp. 63-67.
- (10) J.-P. Vernant, *Mythe et société en Grèce ancienne*, pp. 78-81, Paris, 1988.
- (11) J. Halverson, Social Order in the *Odyssey*, *Hermes* 113 (1985), pp. 129-145; cf. Id., The Succession Issue in the *Odyssey*, *Greece & Rome* 33 (1986), pp. 119-128.

- (12) M. Finkelberg, Royal Succession in Heroic Greece, *Classical Quarterly* 41 (1991), pp. 303-316.
- (13) C. G. Thomas, Penelope's Worth: Looming Large in Early Greece, *Hermes* 116 (1988), pp. 257-264.
- (14) R. Scodel, The Suitors' Games, *American Journal of Philology* 122 (2001), pp. 307-327. なお以下の論述では、このスコデルの論文を参照しているが、筆者の解釈や見解も多分に織り込んで考察する。
- (15) N. Felson-Rubin, Penelope's Perspective. Character from Plot, in: S. L. Schein (ed.), *Reading the Odyssey: Selected Interpretative Essays*, Princeton, 1996, pp. 163-183 (esp. p. 173-179); J. Russo, Interview and Aftermath: Dream, Fantasy, and Intuition in *Odyssey* 19 and 20, *American Journal of Philology* 103 (1982), pp. 4-18.
- (16) 上のエウリュマコスの言葉の引用において、アンティノオスが王たらんと目論んでいたことを述べた52行とテレマコス殺害に言及した53行は、作品中のそれまでの経過とは逆であるため前後倒置 (hysteron proteron) であるとの解釈もなされているが (cf. J. Russo, M. Fernández-Galiano & A. Heubeck (eds.), *A Commentary on Homer's Odyssey*, Vol. III, Oxford, 1992, p. 230)、筆者はここでは、むしろアンティノオスが抱いていたとされる将来の見通しについて触れられていると見なして、テキストのままの順序で訳した。
- (17) 松平千秋訳・注、ホメロス『オデュッセイア』(下)、岩波文庫、1994年、p. 341。
- (18) Cf. N. Yamagata, *Homeric Morality*, Leiden/New York/Köln, 1994, pp. 184-185. aristos の同族動詞 aristeuein のこの意味における典型的な用例は、『イリアス』において父ペレウスがトロイア戦争へ向かう英雄アキレウスに述べたとされる言葉 'aei aristeuein, kai hypeirokhon emmenai allôn' 「つねに最も勇敢に戦い、他の者らよりも優れているよ」(II. 11.784) であろう。
- (19) 本章では注(14)に記したように、スコデルの三段階説を基本的に取り入れながら、筆者自身のテキスト解釈を新たに加えて求婚者たちの動向の変化に関して詳しく考察してきたが、この第三段階の状況についてはスコデルの見解に対して反論せざるをえない。スコデルは、上述のアゲラオスの発言における「最も優れた男で、最も多くの贈り物を与える人と結婚しなさい」と母に告げよとの言葉の重要性を見落とし、この時点から始まる求婚ゲームの最終段階すなわち弓競技が、妻としてのペネロペイアのみを目的とするものであるとしている。
- (20) Cf. W. G. Thalmann, *The Swineherd and the Bow: Representations of Class in the Odyssey*, Ithaca/London, 1998, p. 185.
- (21) 戦闘(戦場)の零和ゲームについては、前章(小川、注(1))参照。
- (22) サルペドンの言葉については、前章(小川、注(1))参照。
- (23) Cf. Thalmann, op. cit., p. 188.
- (24) Cf. Thalmann, op. cit., pp. 228-229.
- (25) 『イリアス』においてヘレネは、第3巻のメネラオスとパリスの決闘のときトロイアの城壁の上に姿を見せるが、この場面はトロイア戦争の発端を「再演」する意図をもって描かれているにすぎず、彼女はその後の長い戦闘の語りでは背景に退いており、再登場するのは、ヘクトルの出陣(第6巻)と葬儀(第24巻)のときに限られている。また『イリアス』では、アキレウスとアガメムノンの争いの原因となった女性ブリセイスについてもあまり語られず、彼女が言葉を述べる場面は、パトロクロスの死体を前にして歎くときだけである(II. 19.282-300)。
- (26) 『オデュッセイア』においてペネロペイアは、夫オデュッセウスを奪った原因でもあるトロイアでの争いやその後の受難のような英雄世界の物語をやや遠慮しているかのように描かれている。それを示す最も典型的な例は、第1巻において彼女が吟誦詩人ベミオスによって語られるトロイア戦争の英雄たちの帰国物語を途中でやめさせる場面である(*Od.* 1.325-344)。そのとき母の拒絶の言葉を聞いたテレマコスは、彼女をたしなめて女部屋に退かせた(1.345-364)。その場面と同様に、第21巻でもテレマコスは、男たちの本格的な闘争の直前にペネロペイアを女部屋へ引き上げさせる。そしていずれの場面でも、彼女は息子におとなしく従っている。
- (27) カーツはオデュッセウスに対する求婚者たちによる再認について、(1)家の主人として、(2)英雄として、の二段階で考察しているが、筆者はむしろ、その再認が(1)対等身分の者(客人)として、(2)家の主人として、(3)パシレウスとして、の三つの段階で進むものとする。Cf. M. A. Katz, Homecoming and

- Hospitality: Recognition and the Construction of Identity in the *Odyssey*, in: S. M. Oberhelman, V. Kelly & R. J. Golsan (eds.), *Epic and Epoch: Essays on the Interpretation and History of a Genre*, Lubbock, 1994, pp. 49-75.
- (28) ナグラーは、この「危険のない競技 (aethlos aaatos)」という語句の形容詞 aaatos が「迷妄・錯乱」を意味する ate に由来しうることから、そうした競技の終わりは——内乱を開始したユリウス・カエサルのルビコン渡河に匹敵する！——抑制のない暴力的行為の始まりを含意するとして、英雄の求婚者殺戮の意義に関して興味深い考察を展開している。Cf. M. N. Nagler, *Odysseus: The Proem and the Problem*, *Classical Antiquity* 9 (1990), pp. 335-356; Id., *Penelope's Male Hand: Gender and Violence in the Odyssey*, *Colby Quarterly* 29 (1993), pp. 241-257; Id., *Ethical Anxiety and Artistic Inconsistency: the Case of Oral Epic*, in: M. Griffith & D. J. Mastronarde (eds.), *Cabinet of the Muses: Essays on Classical and Comparative Literature in Honor of T. G. Rosenmeyer*, Atlanta, 1990, pp. 225-239.
- (29) 二つの嘆願の類似性については、cf. K. Crotty, *The Poetics of Supplication: Homer's Iliad and Odyssey*, Ithaca/London, 1994, pp. 151-156. ただシクロティは、オデュッセウスがオイコスの主人としての地位を確保するためには暴力が唯一の手段であるゆえ、求婚者殺戮の戦闘は（『イリアス』の場合と同じく：筆者注）人間存在の不可避の条件として描かれているとしつつも、『オデュッセイア』では戦勝による誉れ (kleos) が『イリアス』におけるほど強調されていない点に注目している。
- (30) フェニクは、求婚者殺戮の場面と『イリアス』における戦闘場面の構成上の類似性について考察している。Cf. B. Fenik, *Studies in the Odyssey*, Wiesbaden, 1974, pp. 99-102.
- (31) 前章（小川、注(1)）参照。
- (32) Cf. Thalmann, op. cit., p. 205.
- (33) 『オデュッセイア』は戦争をあとにした英雄の「デザプラントイサーージュ」(désapprentissage) すなわち「旧来の英雄的理念からの脱却」を描いた作品であるという興味深い最近の研究もあるが（西村賀子『ホメロス『オデュッセイア』——〈戦争〉を後にした英雄の歌』、岩波書店、2012年、pp. 201-222）、作品後半の求婚者たちとの闘争に関しては、筆者はむしろ「旧来の英雄的理念」への回帰すなわち「レアプラントイサーージュ」(résapprentissage) の側面を強調したい。たしかにオデュッセウスは、クロティが指摘したように（注(29)参照）、求婚者殺戮のあと歓喜する老女奴隷エウリュクレイアを制して「殺された男たちに対して功を誇るのには畏れ多いことだ」(*Od.* 22.412) と語っており、英雄的な名誉観に対して覚めた視点も備えている。しかしその謙虚さは、多数の同郷の若者を殺害したことの後悔に由来するのではなく、むしろ大業を成し遂げたあとの大きな自信と、殺戮後に当然発生しうる外部からの反動に対する慎重な意識にもとづくものと思われる。
- (34) J. M. Redfield, *The Economic Man*, in: C. A. Rubino & C. W. Shelmerdine (eds.), *Approaches to Homer*, Austin, 1983, pp. 218-247 (esp. p. 245).
- (35) Redfield, art. cit., pp. 227-235, 244-246.
- (36) Cf. Katz, *Penelope's Renown* (op. cit.), pp. 3-6. とくに第24巻でアガメムノン亡霊が述べる「ベネロペイアの徳の誉れ (kleos) はけって減びないだろう」(*Od.* 24. 196-197) という言葉はきわめて印象的である。
- (37) Cf. Redfield, art. cit., p. 231.
- (38) ナグラーは、乞食の男が弓張りを申し出たときのベネロペイアの提案（前掲の引用 *Od.* 21.331-341参照）が、男たちの零和ゲームを回避しうる唯一の妥協策であったと論じている（cf. Nagler, *Penelope's Male Hand* (art. cit.), p. 248）。またクロティは、求婚者エウリュマコスがオデュッセウスに願い出た賠償金による和解案（前掲の引用 *Od.* 22.48-59参照）が「最も穏健な解決策」だと指摘している（cf. Crotty, *The Poetics of Supplication* (op. cit.), p. 154）。しかし作品中では、そのような抜け道は——例えば『イリアス』においてアキレウスが、第9巻でアガメムノンの代償の申し出を拒否し、また戦場でも敵からの補償の約束をともなう助命や遺体返還の嘆願をすべて拒絶した場合のように——実際には英雄によっては選択されないものとして述べられているのであり、その点にこそ、求婚者殺戮の迫力と意義があると思われる。

キーワード：ホメロス、『オデュッセイア』、英雄、叙事詩、ポリス、オイコス、名誉、競争

Abstract

The Homeric Cycle Will Not Be Broken:
On the Rebirth of the Ancient Epic Poetry (2)

OGAWA, Masahiro

Homer's *Odyssey* is an epic narrative of the hero who, after the long wanderings, returns to his home and finds his wife wooed by many suitors and his household facing a critical situation due to their continuous consumption. This paper has discussed for what purposes the suitors want to marry Penelope and through what stages their intentions are modified, with the result that they turn out to be aiming not so much at material property and even the hero's wife herself as at public honor and maximized social evaluation with which they can gain the position and prestige of paramount chief (*basileus*). The contest of bow and the subsequent deadly battle in the last books can be seen as a conflict where competitive values such as the highest status in community (*polis*) and the head of noble family (*oikos*) are engaged. It is by enacting those values, first in a "harmless" and then in a "harmful" struggle, that Odysseus recovers his dual identity in home and the society of Ithaca. The simultaneous and compound performance of those distinct, but related, values in a violent fighting seems to represent, in contrast with simpler heroic battles in the *Iliad*, the broader perspective from which the poet viewed the real tension and close relation between public (political) and familial (economic) life in his contemporary Greek world.

Keywords: Homer, *Odyssey*, hero, epic, polis, oikos, honor, competition